江戸名所圖會

十

ル 4
3605
10

武蔵國総社六所明神社　府中驛路の左側よあり
麻止乃豆乃天神社是なり後世ふ至るまで同く式内大
合せ祭る故ふ今両社一社の称あり神主ハ猿渡氏其餘社司
社僧等奉祀す

本社祭神　大己貴命　相殿　素盞嗚尊　伊弉冊尊
瓊々杵尊　布留太神　以上六神これを俗よ
天下春命　稲倉魂大神　以上三神これを客来
瀬織津比咩命　六所明神と称せり
三所の神と称せり

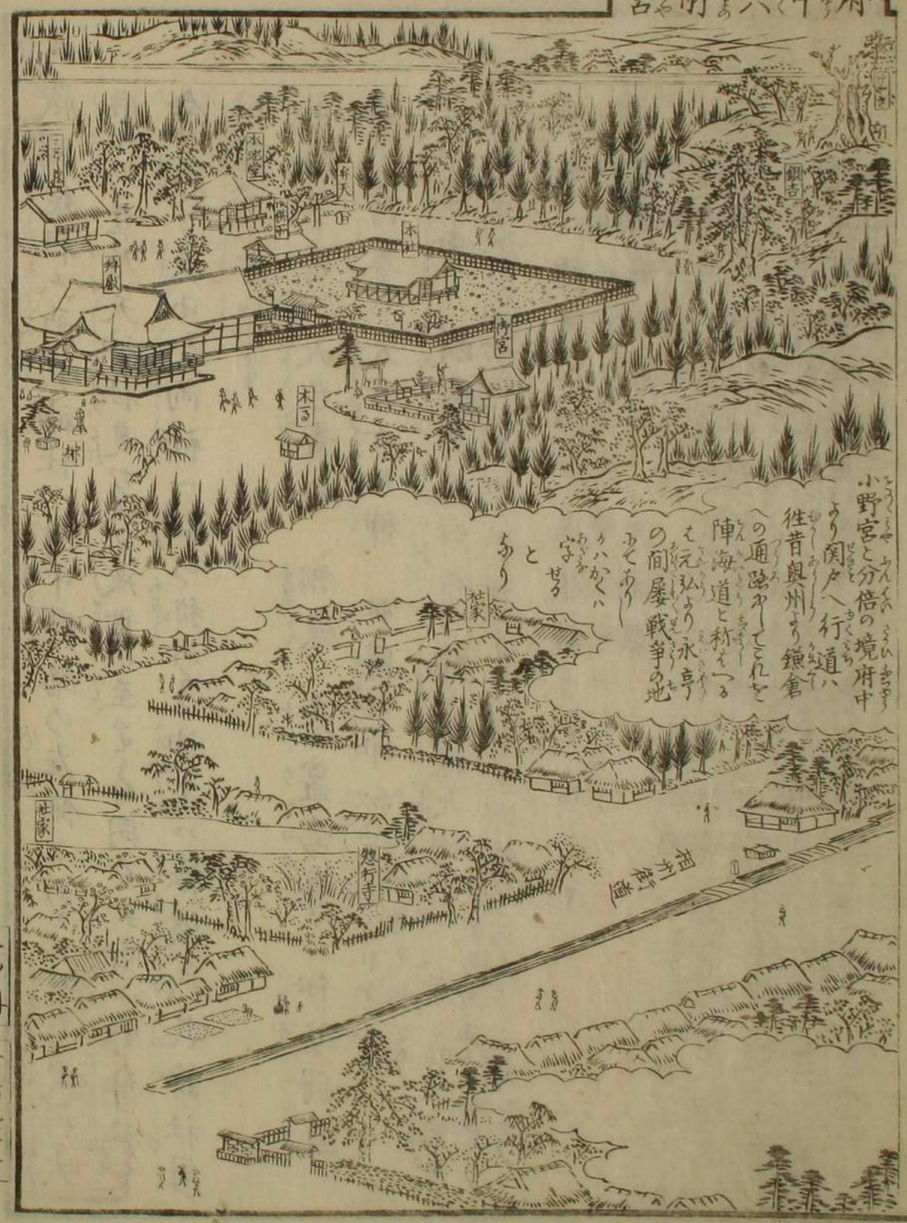
ゟ〳〵九神合せて共六所宮と称す此三神のゟハ一宮と小野神社との条下ゟ詳なり

延喜式神名記曰　武蔵國多磨郡八座
大麻止乃豆乃天神社云云
武蔵國風土記曰　多磨郡
麻止乃智天神　圭田六十七東六毛田
所祭大己貴命也安閑天皇乙卯始奠宮社花時以
花祭之云云新稲祭之云云
治暦六年八月十一日己酉及晩御輿所有
為卿祈禱被立奉幣御使於
武蔵六所宮

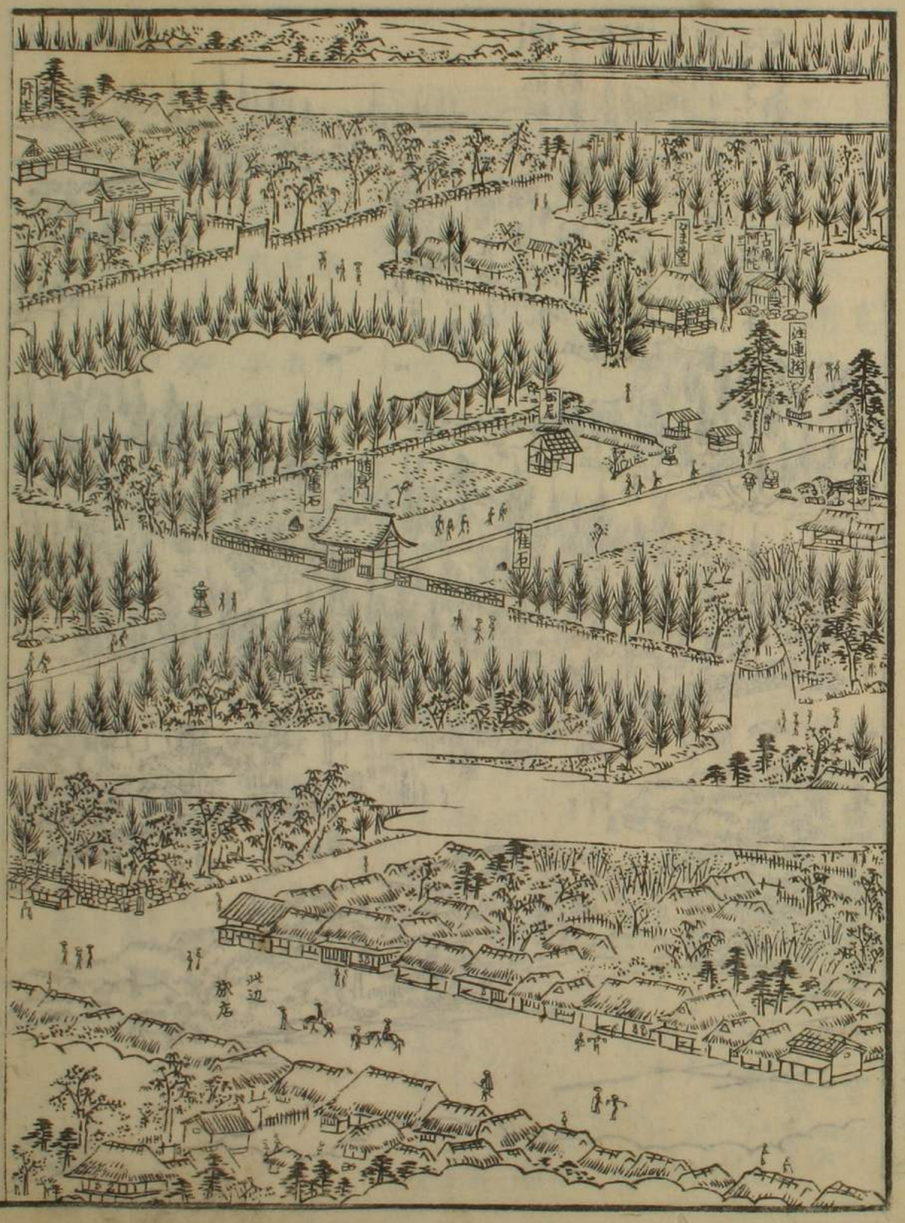
東
御産氣武衛渡御中畧
伊豆宮根両所擡現并近國宮社
葛西三郎云云

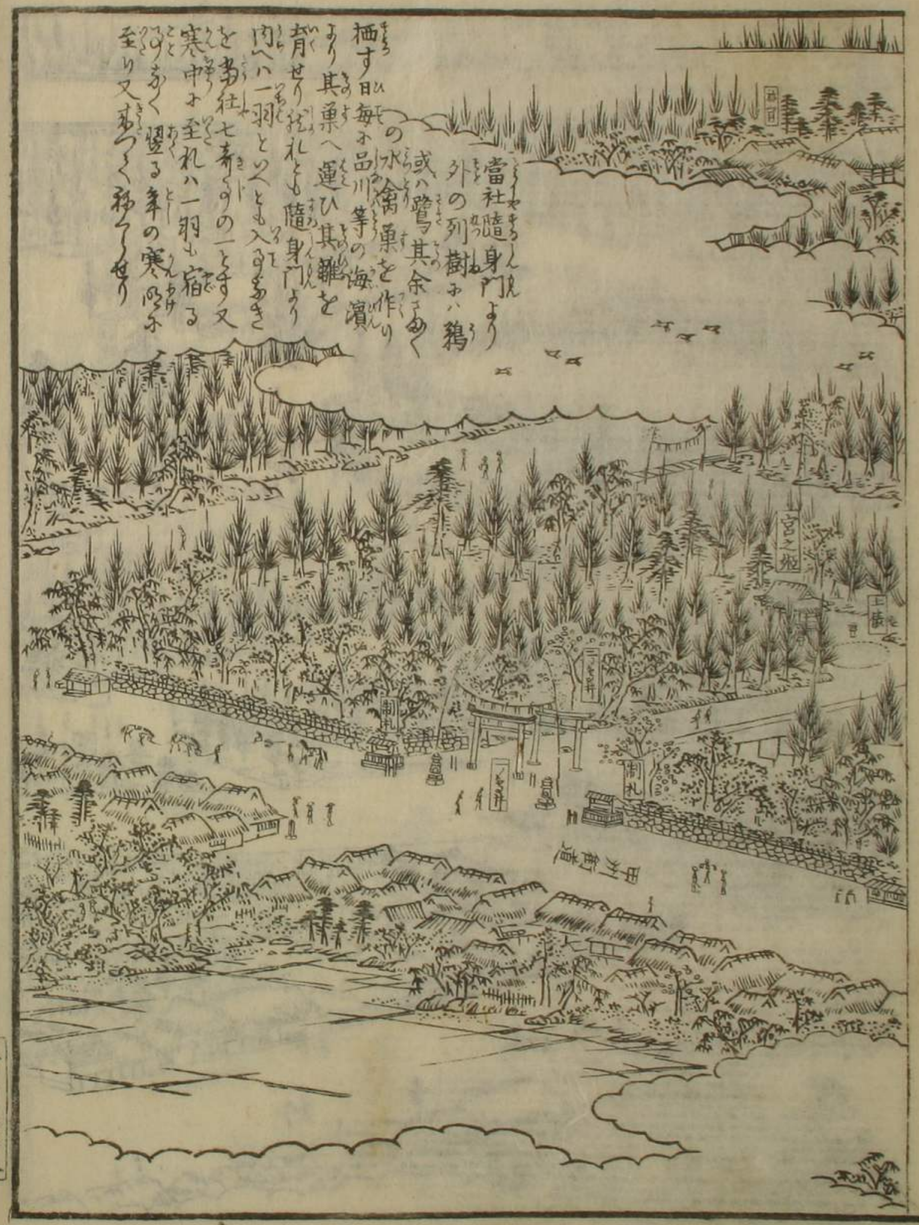
延喜式内大麻止乃豆乃天神社
昭和十九年四月調査
故三上於菟吉氏旧蔵
三上参考文庫
寄贈

門司
3605
巻 10



小野宮と分倍の境府中
より関戸へ行道ハ
往昔奥州より鎌倉
への通路やて
陣海道と称そつる
と云弘安より永享
の間屡戦争の地
なりハかくハ
なりと
ふり





同書曰　寛喜四年二月二十四日武蔵國六所宮拝殿破壊有修造之儀武蔵左衛門尉資頼奉行之云云

本地堂　本社の左よあり中ニハ釋迦如来左右ニ正觀音と地蔵菩薩とを安置せる年中恒例神事等の節ハ拝殿よりそ大般若経を讀修せり　此堂よ

神輿庫　同し並よあり基のうへに小九基なりす社司神輿八基を収む

秘と　阿弥陀如来銕像　同左ハ並ハ高七尺ほとの座像なり上ハ假屋あり北面す

鐘楼　建長五年癸丑二月十八日武蔵國六所宮拝殿破壊有修造之儀武蔵左衛門尉資頼奉行之云云本社の左よあり中ニハ釋迦如来左右ニ正觀音と地蔵菩薩とを安置せる年中恒例神事等の節ハ拝殿よりそ大般若経を讀修せり　此堂よ神輿庫　同し並よあり基のうへに小九基なりす社司神輿八基を収む秘と　阿弥陀如来銕像　同左ハ並ハ高七尺ほとの座像なり上ハ假屋あり北面す

上古創造此社より社務あり一頃門戸のあり一社隨身門
る額を注連を 御常間戸 御厩
の木像を 宮之姫社隨身 奇稲田比咩命木花開耶
置せり 本社の右北の神なり例年七月十二日十三日近邑の神職
おのおの神楽を奏せむ 絶倉時世頼朝卿の下知ハ天正の兵火ニ
なり 頼朝卿の華表の内左右森の外ハ
馬場 一条と久馬場あり又大門甲州街道と開く北の方一の華表の内の左右
一条の馬場あり慶長年間大坂落城の後寄附
欠馬場の馬場の地多くハ社司の住居となりぬ
但馬欠馬場の馬場の地ハ古牧の駒を
馬市 毎歳五月三日ハ始りて九月晦日よ終るを定規とす社前大路の傍に制
札を建く以警す此地の馬市ハ国造の在せ一頃毎歳牧の馬を取
帝闕へ進す 此馬市裏保戸部よ此地となり 旧跡なり
浅草の藪の内と麻布十番との二所へ移されり然
今も江戸馬口労頭る末保を佐山本佳たあり無数の当社に
詣此所のる場ふおのくのる馬の御馬ハ乗し旧式を守りく後社内ハ安座
なりる
東照大権現宮へ詣す

制札

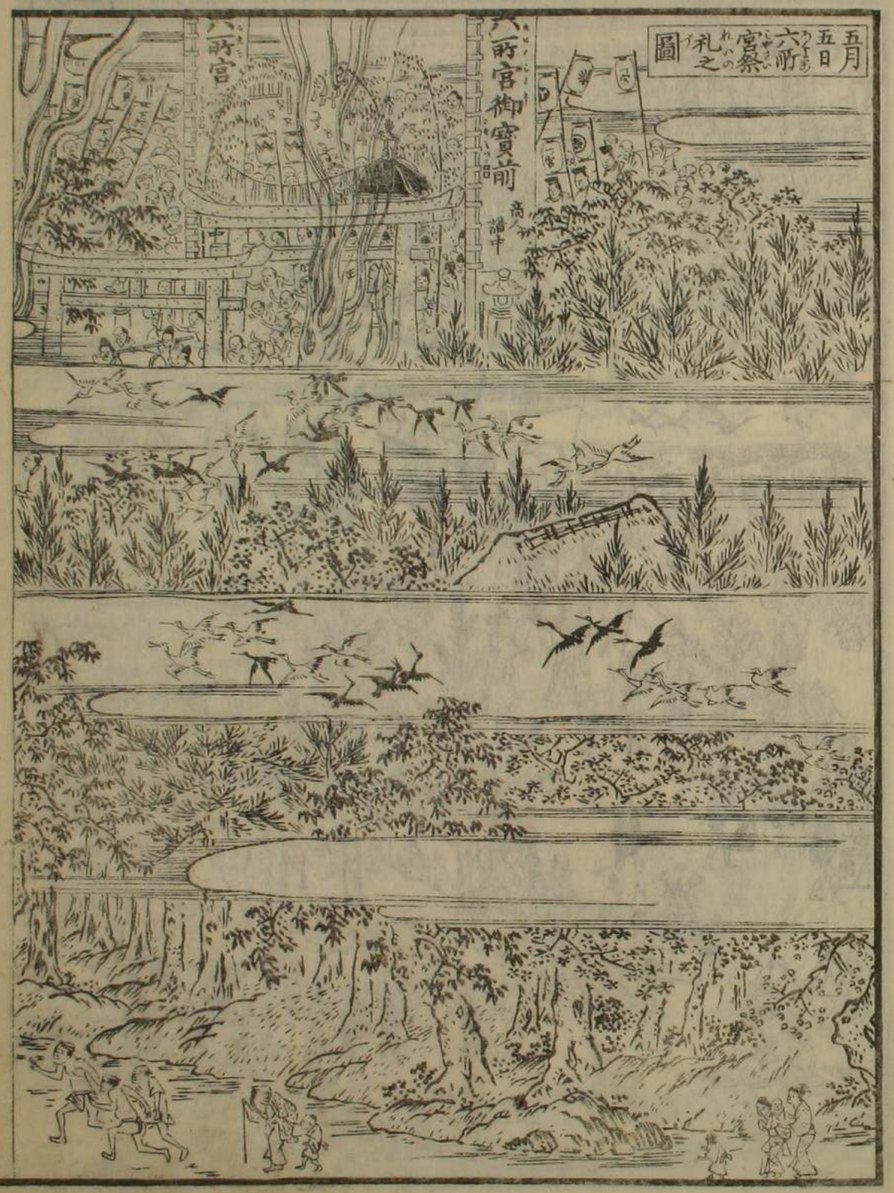
社前大路の入口ふあり
慶長年間ハ建らること云

掟

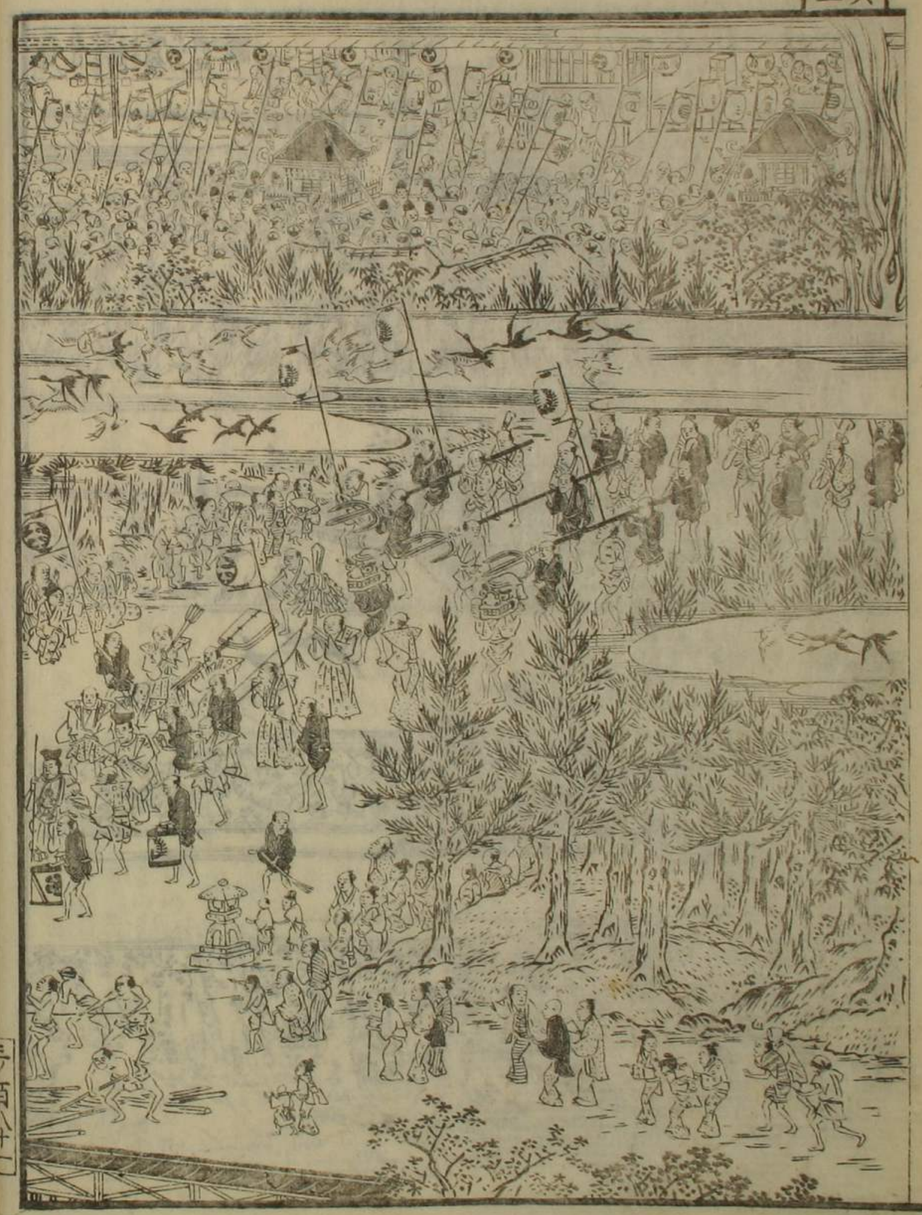
一此所よおのて馬町多事
五月三日ハ物日を限くより初め
九月晦日を限くより
狂気ハあるものもおるを
ハ一巻遠慮と掌
許ハ曲すくるき
者ハ仍下知を
月日 奉行

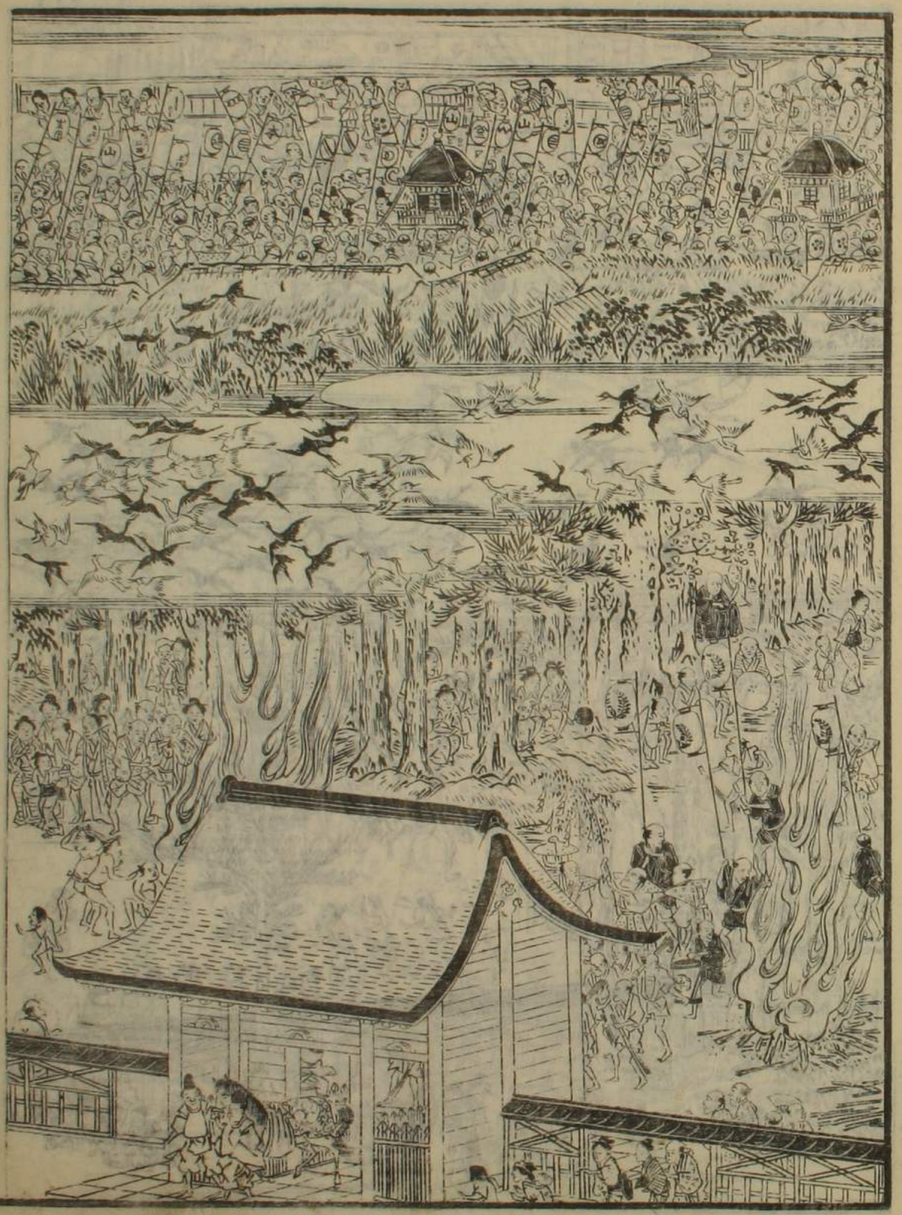
競馬 毎歳五月三日の夜ハ此宮の御旅所の前甲州街道府中番場宿の大路ハ
華撿使として御旅和の 神楽 同
傍ある假家ハ伺候す 同月四日拝殿
殊ハ恐れかし 大神事 同五日ハ修行
神官各四月二十 当日ハ終日神楽を
五日より修行す 奏す
扨ハ当日ハ神輿ハ基の内七基ハ二の華表
まる神輿ハ基ハ隨身ハ一基の前より
一基ハ隨身ハの前より 左ハ
過の旅和へ 社家の華表の前より
深秘の神 神主儀渡氏農夫野口とのくる家
神主儀渡氏農夫野口と称ある家ハ往古大已貴命始く出現の時一夜この家に
称ふ此野口と称ふ 又同し農家岡野とのくる家ハ
府中本町の方より出く
社家一統神主の宅ハ集会
甲州街道の大路を西へ渡し
番場宿の角札
辻ハ 此間社家
大幣を捧け
神輿ハ基ハ二の華表の前より
左ハ
府中本町の方より出く
番場宿の角札
辻ハ 此間社家
大幣を捧け
神輿ハ基ハ二の華表の前より
左ハ

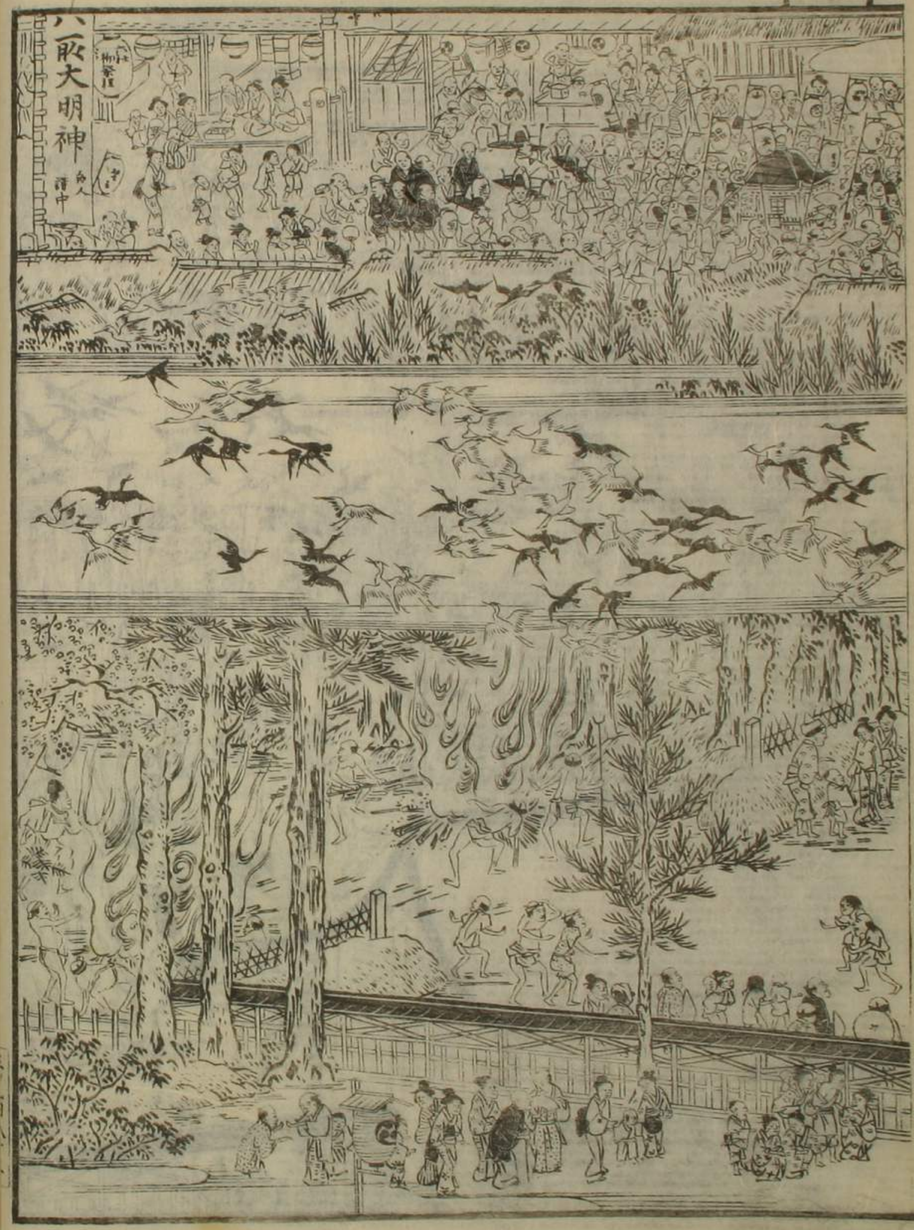
五月五日 六所宮祭礼之圖



旧例なり 此家八大巳貴命出現の時宿を求めるひしりと思ひのすありて一家
殺れそうしらハ辞しやせんと云ひしの古き例を改すしそかくもるるの
神ゐ旧式こそく修ふ還幸の儀をなせり 神主ハ神馬小
衆一侍旅所の前ふおのそ流鏑馬を射終りて太鼓を打なせハもろく社壇
より市店ふ至るまで一時ゐ燈火を點もろ〳〵先の間きふ〳〵尤めさまし
ゐ八馬上かく前駈こう歸輿ふ及むて二鳥居の左右と本社の前随身門の前西の
馬場欠場の方へ至るの間等すくく四箇ゐ所て神火を焚て白昼の
やうく又神輿供奉の道路を照すふの桃灯むおくくして実ふ壮観う 御田植神
事 同六日ふ修りも祠後百歩あまりを隔て南の方の稲田ふおのくこうを
於く八此日當國の人民當社ふ詣神田の豊熟我上ふあよもうもすを祈
かふ枝を持一来るく田上ふ集り一朝ふ挿終りて後戎ハ罷り或ハ列かを
催しそ與とりくおり依枝こうもくく泥ふ侵もろくも明日ふ到れハ就然として
起又そ穂を異よすとのつもく終ふ穂を同くく節の進退ゆより違あるも歳と
しそ順あるくろうすなく水旱蝗蝗の災なし 谷俗くく當社七奇ふの一こうを
天下泰平神事 六月廿日ふ修めす 標鎮を供 神乐を奏を康平五年
此日を以く 小祭 七月七日よ 義家西公奥州発向の時戦勝あり
祭こうのく 麻裃を 制ふもる 俗帷子祭又ハ帷子市ともおうハ古此辺多く
都ふ貢まりそ餘のこうのを八此地みく交易せ〳〵うり 中ゆも七月七日をもとめて
せ〳〵和ふ此名 天下泰平神事 七月十二日十三日両日の間宮之姫社と末社とふ
ありとこうり 神乐を奏す 前の宮之姫の社のお
ゐ絆 八月朔日終日神乐を奏す 氏子の輩 年の豊熟を
あり 田面神事 此日射力を與ゐせり 餘一季の名の終すハ尤多く
こうくくこうこうを挙ふ遠あるすのを
社記曰 景行天皇の四十一年 辛亥五月五日 大巳貴命此小野縣に

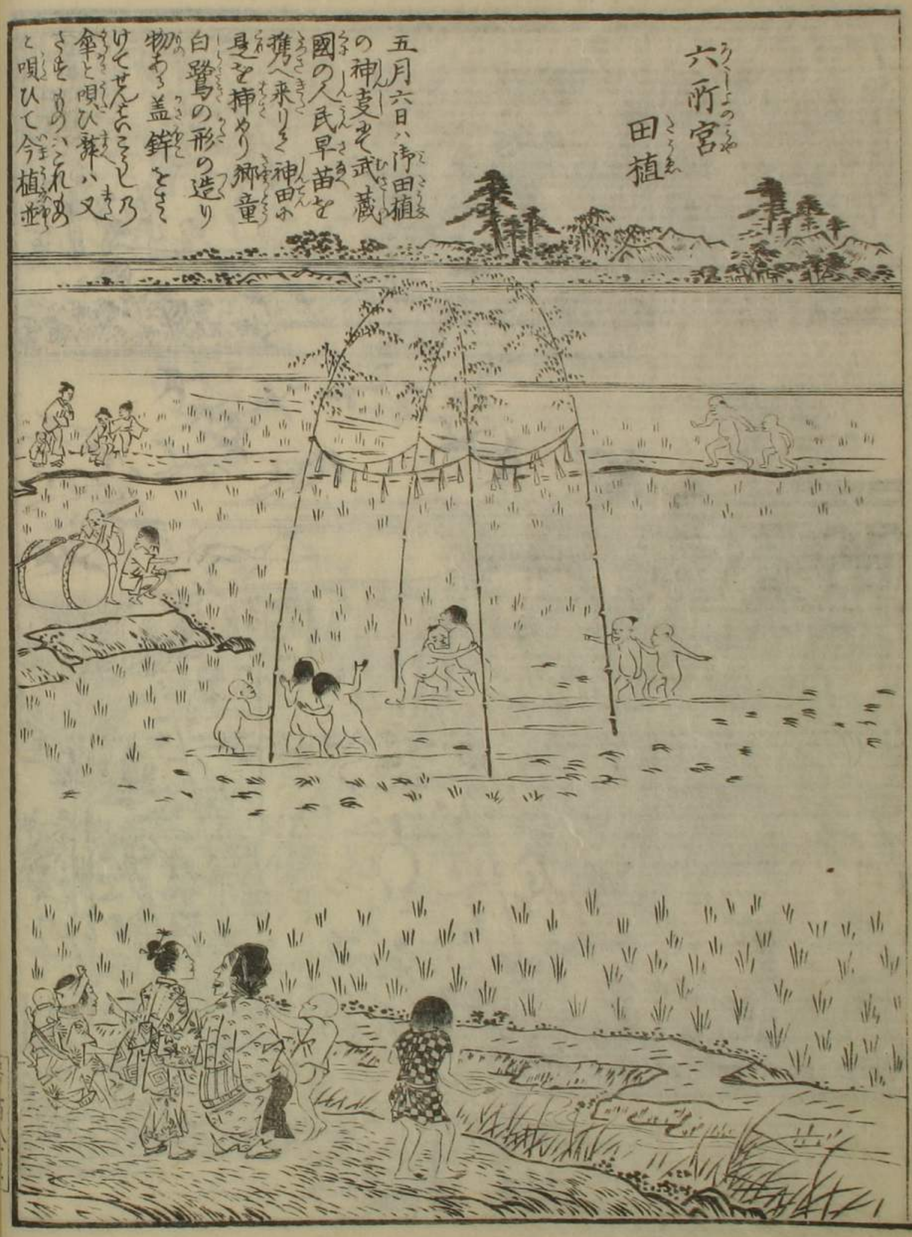





八敢大明神

六所宮
田植

五月六日ハ淨田植の神事を武藏國の人民早苗を携へ来りて神田の邊を挿り納童白鷺の形の造り物わら蓋鉾をさゝけそれのこゝしの傘と唄ひ舞ハ又さなぶりものいこれもの唄ひて今植畔

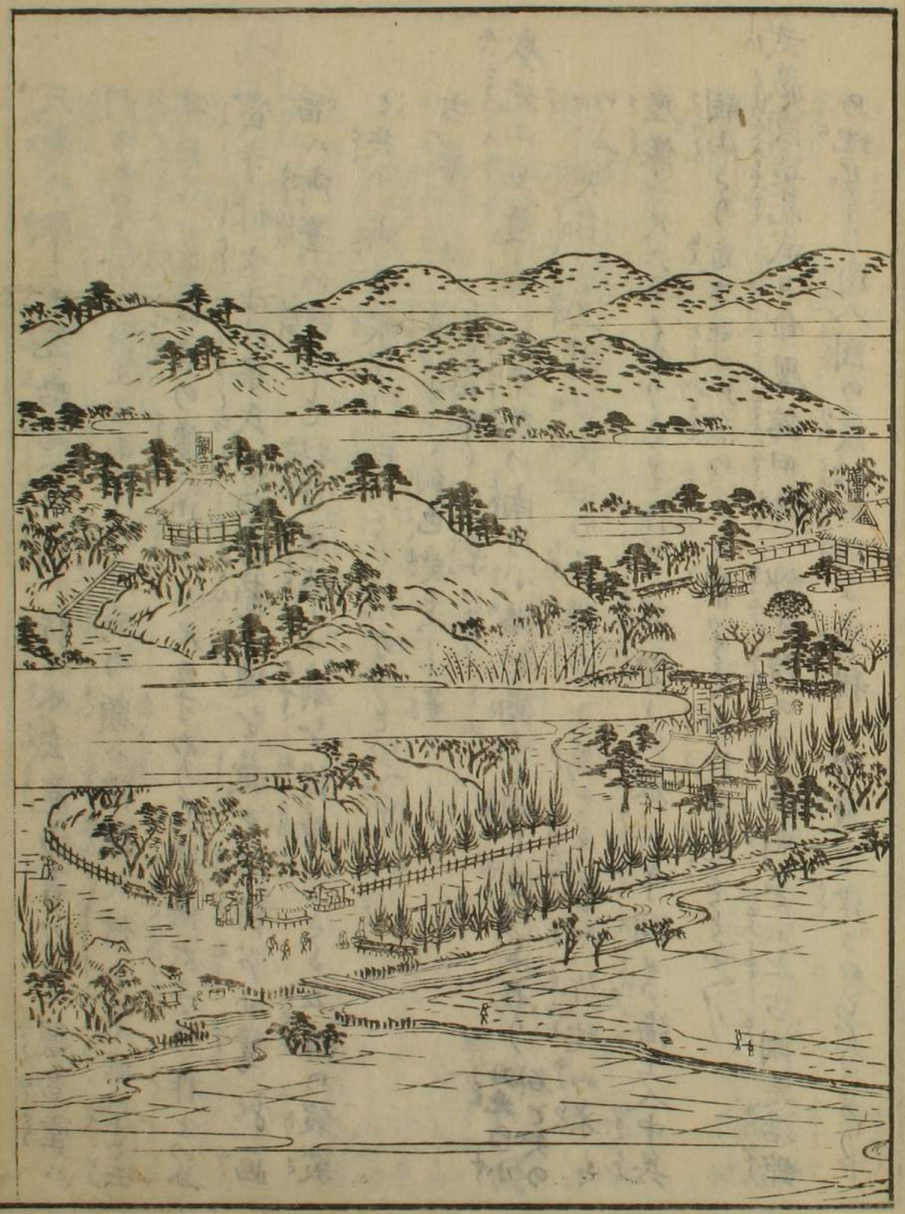


山の中ハ下り坂にて早苗とるしづのめまでかゆ有一ツも似をひとりの中ハあつこちうへおのもちハいとめでたき起立つ業ぶかきもあんとしてうゑつゝさうりやー

出現神託あるより祠を経営して里人崇敬しまる
大麻止乃豆乃天神是なり
延喜式大麻止乃豆乃〻風土記大麻止乃知と豆ハ通音なり又大乃〻を後
麻止を以て保麻止と〻或ハ布止麻止多麻止なりと云へり
成務天皇五年乙亥兄多毛比命をして此地ホ國造
天穂日命の孫出雲臣祖名二井
宇佐諸忍之神秋命十世の孫なり
因て茲ホ府を創きめ武蔵國の國造の推薦
又大巳貴命ハ此地出現の霊神あれハ是を崇て祖神なるを以
素盞嗚尊を合祭〻兄多毛比命ハ出雲の臣の祭神の内珠ホ素盞嗚尊を崇奉りて神秘ありと云
相殿ホ伊弉册尊瓊々杵尊大宮女命布留大神等の四神を配
祀〻新ホ此地ホ宮祠を経営あるより圭田を附して國社となし
此を称して六所宮大麻止乃知天神と云又天下春命
小野神社の祭神なり
瀬織津比咩
神を六所宮の相殿ホ迁座なして客来三所と称〻是を
祭るホ國社の禮を以す爾来大麻止乃知天神小野神社二社合
祀の社とそなりぬ
安閑天皇乙卯年ホ至りそハ春冬ハ

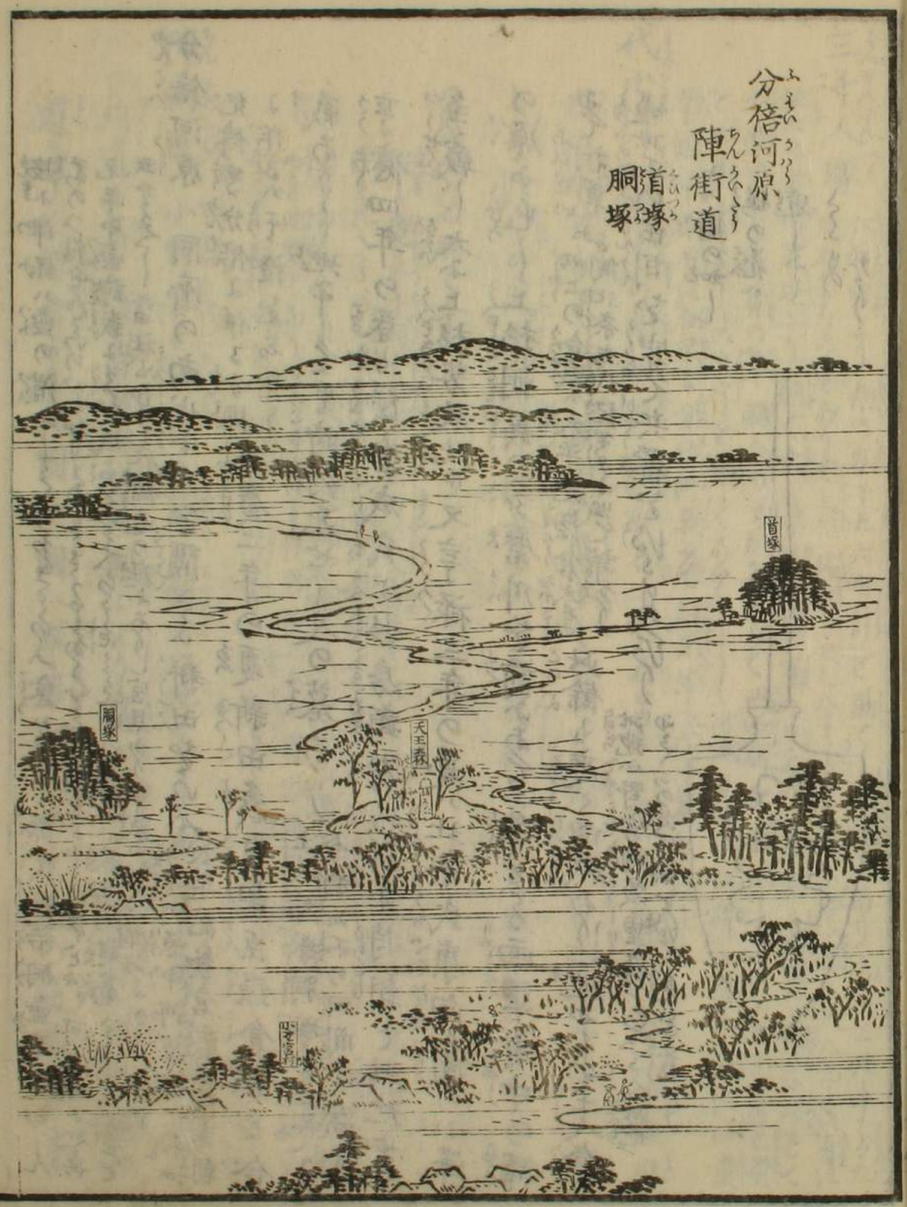
二時の祭祀を行〻由旧史ホ〻そ〻り然ホ星霜を歴て康平
五年ホ至り源頼義義家両公奥州安倍貞任宗任一族征伐
發向の時當社ホ詣あり軍の勝利を祈願あり夷賊平治
凱歌の時報賽として一華表の内左右両辺ホ榧数株を種〻
めそ以成功を謝しまる
其列樹今存せり
詣て請禱し大ホ戦勝の功あるを文治年間宮社を再興〻又
壽永年間継嗣を求め頼家公を儲く葛西三郎清重我
しそ神器を献せしむ
寛喜四年ホ武蔵左衛門尉資頼を命ぜ
所の祭祀今ホ連綿として當社破壊の修理をかへらる
将軍家相継て崇敬衰へす後足利家ホ至る迄世〻
廃せすして
就中
御當家
信あり社領五百石を附し御祈禱のことを命せる関原
大坂の両役ある當社の神主猿渡左衛門佐盛道をして御勝
利の御祈禱を修せしめ感状御直書を給ふ後二代

将軍家よりも又御書判の御直書を給ふ殊ホ御在國の
總社〳〵を尊く慶長年間石見守大久保氏某を〳〵そ神
殿を新ゝ國家の祀典ホ列せ〳〵む且命を下し〳〵く馬市北
法則を定給ふ後正保三年府中本町より火出そ當社神
領の地よ至る迄皆悉く焼亡を依て寛文七年丁未大和守久世
廣之侯を〳〵く造營使と〳〵め〳〵宮社御再建ありし
寛永元年注ホ記云神主猿渡三河守藤原盛正天正年間北条陸奥守
氏照の為ホ八王子の城よ籠る此城没落の時盛道こゝふ戦死せ又此兵火の災ホ
かゝり〳〵當社悉く灰燼せり云云
六所宮御旅所　六所明神より一丁半もを西の方府中番場宿の
中程相摸街道への岐道札の辻の傍よあり毎歳五月五日大祭礼
辰ヲ夜六所宮の神輿をあふ辻〳〵まる其式ハ前の条下ホ
詳なり
御田　六所の宮の後の小径を百歩もをもふあり鬱然こる稲
田なり東ハ悠遠ゆ〳〵く眺望分明なり南ハ多摩川の流を隔
て〳〵長岡の上ホ短松の立もをる世ホ所謂向ふ岡是あり此
地北ハ府中の駅舎ゆ〳〵く六所の抹叢鬱然こり
六所宮年中行事の
下ホ詳なり
本覚山妙光院　真如寺と号ス府中本町の南の小路よあり新義の真
言宗ゆ〳〵く花洛仁和寺の御門跡よ属ヲ　清和天皇の御宇
貞観紀元の年真如法親王の御願ホよりく慈恢僧正創
建あり〳〵佛刹こり行基大士彫造の地蔵薩埵をかそるとし
長五寸五分若干の田園を附せ〳〵る然ホ當寺度〳〵の兵燹よ罹り大ホ
荒廃なり〳〵そ永亨十一年己未法印宥源長禄三年己卯
再建し〳〵そ當寺中興の開山となるヲ
天正十九年辛卯御當家より寺領を〳〵つ本堂
家帯の額真如寺の三大字ハ勝仙院僧正日光の筆同〳〵向拝
ホ掲る本覚山の額ハ南山の沙門乗鎮の書裏門本覚山の額ハ



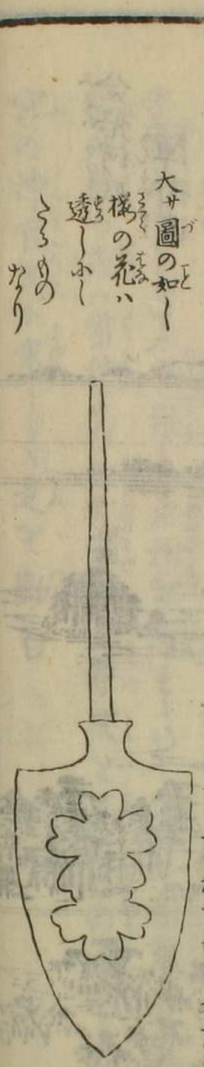
明光院
安養寺

天満の筆書院無為心の額ハ佐々木玄龍の書なり観音堂ハ
門の入口左の山七上よりあり大悲殿の額ハ僧禅大僧正覚眼筆と云
本尊十一面観音の像ハ長二尺五寸ありて聖徳太子の作といふ
當寺什宝より北条氏照の書簡二通を蔵を其餘芦雪画
幅ハ御筆の物ゆえ牡丹唐草より扇を縫物〳〵る五條の袈裟
と共ゆ御當家より給ふとぞ
古磬一枚 筆物ゆえて銅色變ぜし墓ハ
左甚五郎作なりと云
叡光山安養寺 妙光院の南の小路を隔て同じ並びあり
崎と天台宗上州世良田の長楽寺より屬を本寺阿弥陀仏此地の小名を矢の
り 座像一尺六寸ばかりあり作者詳ならず永仁年間当海上人中興
開山なり 近き年地魚の災より罹ざる旧記を亡ぜるゆえ
武蔵國造兄武日命殿館旧跡 妙光院の前より岡を云上古國造居館
の地なり 御八國の後此旧跡より省耕の御殿を建させられしより
大樹屢ゝ入御せられしも正保三年丙戌十月十二日府中
本町より出火して此御殿焼亡せり後ハ御再興もなくふるより享保
年間里民のゝふ住せ陸田となし下されしとぞ故ふ土人ハ御殿地
と称せり此所の眺望右勝れ
按ふ國造ハ神武天皇御宇大倭國檜原より定め天皇の位ふ即ち時葛城
國の造を定め其余功ある者ふ國造を賜ひ又縣主を定めふるとぞ
代々ふ仕せしとぞ和銅の比を總仕の國造百四十四員あり皇朝上世ハ百四十
四箇國ゆえ國毎ふ國造一人ありて御祇祭祀を掌るゆえ賤事を治
(嵯峨天皇弘仁年間に分割併省して六十日本紀よりも六十四国となる)
仁徳帝の御宇より遠江國司又
憲法も國司國造のうえより位高く權重き縁ふ國司國造と次第して新せしとぞ又聖徳太子の
司を置ふ八ヶ國司ハ國造より
こゝより此ふの國史ふ往ゝ國司國造のゝを載られしとぞ是ゆえの世ふ國造を尊ば
れしとぞ
是政村 府中の南多摩川の北の岸頭ふあり此地の里正ふ井田氏の人あり
其家系を按ふ祖先ハ畠山庄司重忠の四男井田四郎重政の末葉ゆえて
小田原北条家の臣井田摂津守是政ゝ子孫なりと云天正十八年小田原
没落の頃八王子の城敗れしより後此地ふ住を依て是政村の名あり



悲願山善明寺　圓養院と号ス府中本町より閘戸へ行道の右側ニ
あり　相模街道ニして　天台律院ニ〳〵常明院ニ属ス本尊ハ阿弥
陀如来の像を安ス坐像一丈六尺あり　胎中ノ慈覚大士彫造の
弥陀如来の像を安ス　開創年
久く中古寺院荒廃して記録を失ふ然ル近来編無為解脱居士
俗称依田伊織　當寺を再興あり〳〵證海上人を中興開山とし〳〵田園
貞義　等を寄附せり故ニ居士の肖像あり　東帯の像なり側ニ内陣の額ニ
眦尼蔵とあるハ准后公遵法親王の筆ニ〳〵解脱居士の墓ハ
堂後ニあり　彼岸山文庫ハ本堂の右ニあり　庫中収蔵する処の
書籍ハ解脱居士の蔵書ニして〳〵百三十二箱あり　（文庫ニ収むる所の書
籍目録一冊あり）
津保宮　同所四丁ばかり西南の方下河原農民の地ニあり　當社ハ國造
の霊社なりと〳〵今纔ニ茅祠を存するのミされど毎歳五月五日六所
宮大祭の日ハ當社より六所宮へ奉幣使を立る旧式ニ〳〵則六所
宮の神官馬ニ乗して是を勤む

按ずる津保ハ壺の誤ゆゑくつ
わの意なるべし源氏物語洞壺巻にも
其のつぼねとかけり
元年の壺前栽にまぎるゝを植おきて
云々とハ家居の建竜と
書のつゞきを
國造の怨ありし宮居ありし
今下河原中河原打
越南朝
分倍河原　同所の南代小川を隔てる耕田をの
紀傳等の分倍と作る分梅ハ慶
ゝ作るハ誤なり
太平記鎌倉
戦あり〳〵地ゆゝしき時村死せし人の墓あり
亨徳四年の春も漲倉成氏上杉房顕と
争戦し大ゐ上杉勢敗北せし又亨禄三年の夏ハ北条氏康向ヶ岡の小澤
の原ゐ屯し上杉朝興ハ多摩川を前ゐあて陣をとる両軍府中の驛
辺相戦ふ（以上の合戦ハ大平記
北条五代記等ゐ委詳
鎌倉大草
あり）此餘も度〳〵血戦ありし地ゐして土人今も
過ぎ此の田間を穿て兵器を掘ることあり
大サ圖の如し
桜の花ハ
透しふ
くるものなり



　六所宮より南の方十五六町許を隔て道端よりあるり三尺余方九
坎の古塚を違ふ（人あまたの塚ありて
坎の字ハ
朱の新撰字鏡令の下に
限ぎりとあり）此石郡を堀ひろめし時文字を鐫
享徳宇禄等の合戦より放倍河原
埋葬ありしと
此地里正の口碑ゐ伝ふ按ずるに二慶
代小川　府中の南を流る西の方二里あまりを隔て青柳村より多摩
川の水を分く此辺耕田の用水とするより或人云古此地を小川郷
と号ゐ今の代小川ハ即往古の小川の変称ならんかとぞ
おもふ

按ずるに慶長年間官府より六所宮へ寄たまひし書の中ゐ六所宮川流
注されしくだりに項多摩川の水流数條よりわかれて
あるゐされど慶長の後ハ
やゝ地勢とゝのひしかば川を堰留め
字し同一渠を中河原と
耕田をすべて
陣街道　小野宮と分倍との間の耕田の地ゆゝしく府中本町より関戸へ
行道の名とす　肯奥羽等の國くより鎌倉或ハ大磯抔への往還此
道ゆゝて鎌倉より北國東國へ軍勢を向らるゝ頃の通路なりし

小野神社

かふかく称せるもの

小野宮村　陣街道を隔て分倍より艮ノ當る地をもらひ府中本宿の内

僅ノ家數三十軒ばかりの小野ハ上古郡村名らくる時よりの号ゆゑくも

小野縣と称せしもの是なり今ハ府中の舊名ともなり和名類聚

抄ニ多磨郡小野乎乃とあるもの此邨田なりしハ元亀天正の頃ゆゑそ

開發の始ハ漸田數五反程ありしくく小野宮の耕田をさしそ向田よりハ田地

北田間の塚ハ中古の甲州街道府中より日野へ往還の一里塚ゆゑくく今もその野徑を

古街道と唱ふ

小野神社舊址　小野宮村陣街道の右ノあり今廃ノ叢祠を存るのみ

六所宮の条下お詳し合せくく

三　延

武藏國風上記曰　多磨郡　小川郷

小野神社　圭田五十束　三字田

所祭瀬織津比咩也　行祭禮有神戸巫戸等云云

亩仁天皇三年甲午始　多磨郡八座

喜式神名帳曰

小野神社云云

代實録光孝天皇紀

元慶八年七月十五日癸酉授武藏國從五位上小

野神正五位上云云

社記云當社祭神上古ハ瀬織津比咩一座なりしを一宮下春命を
迂座なしまつり又倉稻魂命を配祀して小野神社を三神となしまね
ら せしより其時世あるく最舊社なるを以て 成務天皇五年
乙亥の秋諸國ゝ令して國郡ゝ造長を置のゝ時兄多毛比命も
詔をなり當國の國造として此地へ至て小野縣ゝ府を開きたひ
しより後崇敬厚く再び當社の御神を六所宮の相殿ゝ迂しまね
らせらるとぞ(六所宮ゝ容來三所と称するものハ即是なり下春命も
下に春命を第一とせり 後ゝ迂座の御神ゝもあれとも却て是を祭しと思ふ)
其舊址を標するのこなりとぞ 實ゝ千載の古を想像つゝ
樒拈樹 社の後よりあり今蠟根を存るのこ周圍十尋計其根上百人を座
神道 多麻川の南一宮より此地小野神社へ通る田畝の径路を云
古一宮御神より小野へ迂幸の時の旧路ゝしく中古迂八一宮の祠宮
此路を経て小野社ゝ至り然して後六所宮へ来りしとぞ其頃ハ一宮

より空輿を舁来れるやう小野宮邑の里民舉て多麻川の岸頭
まで送迎せしよし一宮祠宮の口碑ゝ傳ふ
小野牧 今のゝ所ハ府中の北國分寺の邊より小川砂川の間の農
田となりし地其牧の舊跡なりと云傳ふ 小野ハ地名なり猶前の小野宮地
名の条下往古當國の國造年ゝ八月ゝ至りハ此地ゝしく駒を撰て
より詳なり
鳳翩ゝ聲しくるとなり公事根元ゝ八月廿日武藏國小野御馬
四十疋を引ゝとぞ(六所宮馬市条下ゝ詳なり)

拾芥抄曰 年中行事部
八月二十日牽武藏小野御馬云々
又同書 小野 狄父 己上武藏
石川牧 立野牧
延喜式曰 小川牧
右馬寮 駒牧 由比牧 石川牧 諸牧 等
左右馬寮 武藏國 御牧 齒上若不中貢上者便充驛傳馬
式曰 四歳牝馬毎年九月十日國司與牧監若別當人
信濃甲斐武藏仕丁臨牧撿印共署其帳簡繋
國別當仕丁調良明年八月附牧監等貢

凡年貢御馬者中畧武蔵國五十疋諸牧三十疋立
凡諸國所貢繋飼馬牛者二寮均分検領訖移兵部
省其數中畧武蔵國馬十疋下畧
此余北山抄西宮記中右記猶多外ゆゑ略す
年中行事部合
むかし一疋をいけとり殺の戔ふ事也 頓阿

諸
源山称名寺 府中番場宿北の横小路の右側よあり時宗ゆ
相州藤澤の清浄光寺ゆ属也 本尊ゆハ恵心僧都彫造の阿弥
陀如来立像三尺八寸あり也 霊佛を安也此地ハ往古六孫王経基
居館の舊跡なりと云伝ふ 中古ハ六孫王山経基寺と号せしとあり 其後
一光道和上人當寺を草創也 應永元年三月七日寂 後後遊行上人當寺を
再興ありしより當寺ゆ古き大鼓の胴を収む尤古物にしく
内ゆ年号等を記せるもの多し文字讀ミ難し按ゆ往古の陣太鼓ゆん

龍門山高安護國禪寺 等持院と号六所宮御旅所あり九丁ばかり
を隔て西の方甲州街道の左側よあり洞家の禪宗ゆして多
麻郡二股の海禪寺ゆ属也 本尊 釋迦如来 古文一尺五寸半 服士文殊普
賢の像賢俊法眼の作なりと云當寺ハ俵藤太秀郷の開基
ゆして秀郷の宅地の旧跡なりとぞ 後足利将軍尊氏公
中興あり故ゆ當氏公の法号を採て等持院と称也則尊氏
将軍の肖像あり
開山ハ大徹心悟禪師と号ス本堂ゆ武野禪林の額あり
筆者詳ならず
藤原秀郷靈祠 境内坤の方よあり 今稲荷明神よ勧請也
辨慶硯水井 堂後の行基よあり 山地ハ秀郷の宅地の旧跡なるふよし
辨慶此井水を吸て硯の水とし大服若経を書写せしとの伝説を経ハ焼失しを
畫きし掛幅あり 絹地ゆして甚古雅なるものなり又弁慶の画ゆ甚古雅なる
架ゆ彩の掲を弁慶掲と号け東の掲を弁慶机よりく経を書写せる西北の方甲州街道を
あるく而已多くハ水戸黄門光國卿の撰ミひし大日本

史ゐと除きゐひしを名あり
観音堂 表門を入て西面よあり 観音の像ハ伽もも四尺五六寸あり 作者詳ならす
當寺ハ足利家の再興より永徳元年鎌倉左兵衛督氏満小山
義政退治として發向あり頃も當寺よ陣座を儲けらる又應永
六年ゐハ左兵衛督満兼周防の大内助義弘ゟ京都ゟ於て逆心を
起せし時同十一月廿一日京都のゑ合として當寺よ動座なしゐひ
同三十年癸卯春も又常陸國の住人小栗孫五郎平満重ゟ謀叛
より鎌倉より持氏公結城へ發向同年八月小栗落城の後同十六日
當寺よ帰座同三十一年十月廿三日當寺炎上ありしゟハ同十一月
十四日持氏公鎌倉へ還御ありしゟ鎌倉大草紙よええ
たり 當寺什宝の中よ往古ゟ氏公陣中ゆて用ひられしと云古き銅鑼一口あり
石上山弥勒寺 般若院と号ク真言宗やして高安寺より六町あまり西の方同し
街道の右側よあり 真言宗やして府中の妙光院ゐ属を開ク創ゟ
始久しく今ゐあらしゐハ永正二年乙丑擯大僧都法印良ゟ
中興を本ゟ大日如来ハ一尺斗の座像やして作者未詳當寺ゟ
津戸勘解由左衛門尉菅原規繼墓あり

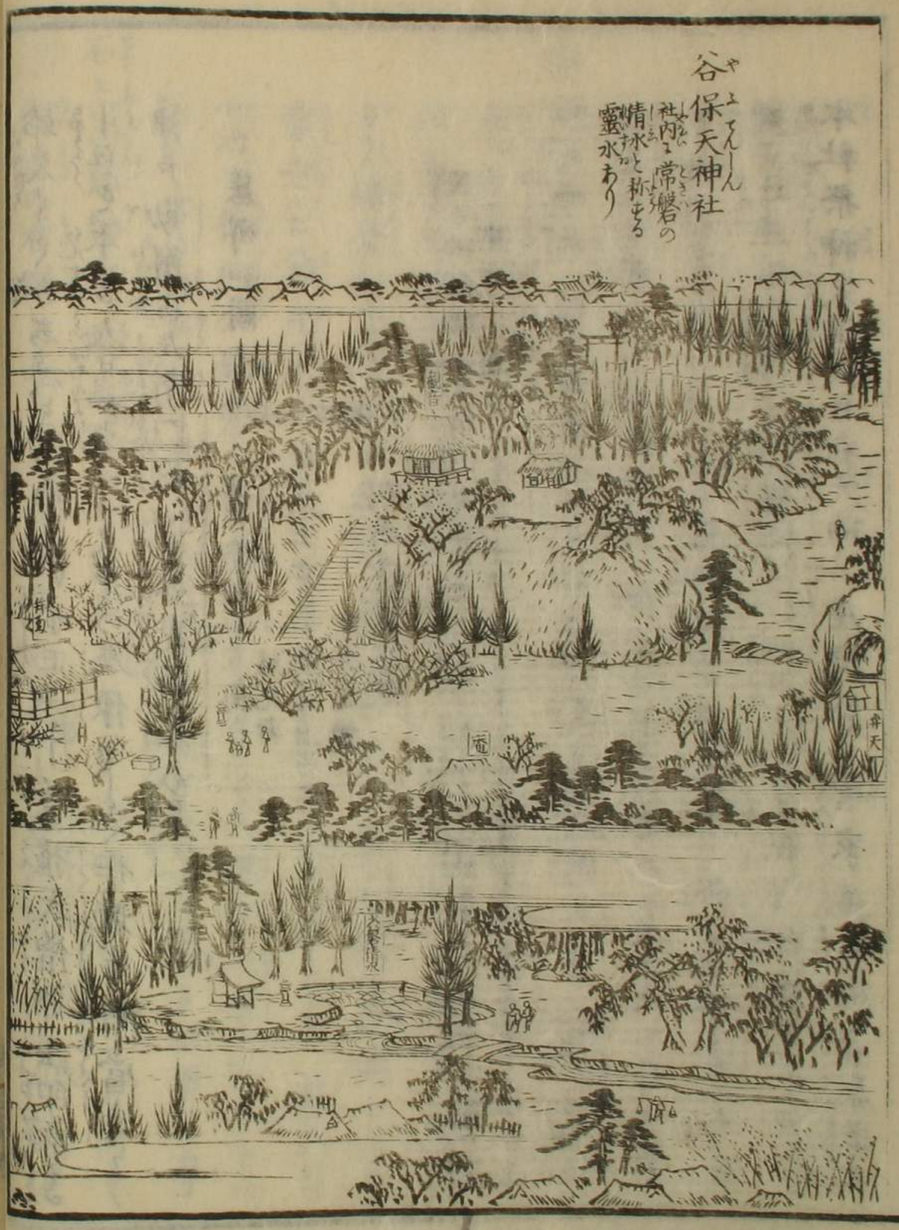
墓碑如圖

津戸勘解由左衛門尉菅原規繼墓
延文五年 子廿五年七月十日死去
門尉菅原規繼 沙弥道繼

按ゐ此勘解由左衛門尉規繼ハ津戸三郎為守の氏族なるん為守の墓ハ八王子の觀泉山大藪寺よあり今ハ幡宿の農民六右衛門とゐるものあり津戸氏其遠裔なりとゐ

谷保天神社 同し街道西の方谷保村より左側よひり
別當ハ安樂寺と号ク祭礼ハ毎歳二月と八月の廿五日又三月十五日
ゐハ開扉あり十一月三日ハ當社往古天神島と称ゐる地より今此
地ゐ遷座なしまゝもし縁あり此日ゐ小菜供を献備るとゐり
本社祭神天満大自在天神一座神躰ハ菅家第三嗣菅原道武

谷保天神社
社内に常磐の
清水と称する
霊水あり



朝臣の手刺なり

額 天満宮 後宇多天皇勅世尊寺経朝卿筆

額の裏ゟ左のやきの二十四字を刻せり又外ゟ同し額の写一枚あり水戸黄門光圀卿こゝを参詣ありて裏書ゟ元禄三年庚午眉毛軒河埜門人経朝卿の筆せしと一額の背面ゟ曰

建治元年己亥六月廿六日乙丑書之　正三位藤原朝臣経朝

常盤清水　裏門出口道の端ゟ小池あり中島ゟ弁財天を安置せ清泉湧出紫の僧某當社へ詣し頃和哥を詠ぜしゟ尤霊しく下流水車を微く日用の助とせり延宝年間筑本地堂　本社の右の岡ゟあり本尊十一面観音の像ハ慈覚大師の作と云

道武朝臣霊社　本社の後ゟあり土人三郎明と称す

社傳云昌泰四年菅公筑前の太宰府へ左迁の時御三男菅原道武朝臣も又此地ゟ流されこゝに三年の星霜を経ぬしゟ延喜三年二月二十五日父君菅公筑紫ゟ亡ぬと聞悲歎のあまり配所の徒然ゟ父君の御像を手親摸刻しゟ旦暮在ろ

如く事へ孝道の誠を尽さゝるひとを後よ一社よ奉しまおしと
となり　昔ハ大杜ゆて僧房も多かりしとあり　櫻本坊　邑盛坊　尊住坊　梅本
坊　松本坊　滝の坊以上六坊中古迄も猶残りしか夫さへ廃れて
今ハ滝の跡と号る一宇　天暦ゟ至りてハ　村上帝　狛犬一雙を寄附ゟ
のこり　是古の滝の坊ありしを　今猶存り　甚の古物　又大般若経四巻を収む源義経朝臣よ
ゐふにしくゝ寄　奉納なりと云　伊勢三郎　亀井六郎及ひ弁慶等の
四人書写ゟる経巻なりとぞ
菅原道武朝臣舊館地　同所二丁許南よあり　空堀城門の跡と覚しく
ゟ所もそんそく四方二町あまりよ封境なり　土人三郎殿屋敷跡と称
ず相傳ふ三郎道武此地ゟ住しゝ當地の縣主上平太貞盛の女を嫁ゟ
一子を得ゟり　其子を菅原道英と号　夫より六世の孫を津戸三郎
為守と号ゟる　（津戸為守の条下ゟ詳ゟ）　或云此地ハ貞盛舊舘の地なゟ
とも　道武主貞盛の女婿よハ未考
假家坂　同所安樂寺の門前百歩計街道の西の方へ向ひて上ゟ坂を
云　建治二年　奉幣使此谷保天神の宮へ下向しゝ頃假ゟ旅
舘を設けしゝ旧跡なる故よ此号ありと云
梅香山安樂寺　松壽西院と号ゟ天神社ゟ一町半あまり西北の方
街道ゟり右側ゟあり　天台宗ゆしゝ東叡山よ属せり當寺ゟ
天満宮の別當寺ゆしゝ天暦年間法圓大僧正開創せりと云
中ゟ奥ハ津戸三郎為守ゟる願なり　本ゟる阿弥陀如来ハ法然上人の
作ゆしゝ座像一尺五寸計ありと云　佛躰の中よ為守注ゟる和の血文を
収むると云　其余什宝よ為守の太刀一振同画像一幅同甲冑の
中よ箪ゟりと云　薬師佛ありしゝ傳教大師の作と云　像材ハ沈香ゟ
しゝ十二神将の像迫悉く高サ一寸斗七厨子の内よ造り置ゟれ
（津戸三郎為守の墓ハ八王子の市中観池山大善寺とゝふ十八檀林の
後裔津ゟ六郎右ゟ法名ハ同所多摩川の南岸なる若造立ゟる石碑
ありしゝ貞享戊辰五百年の遠忌ゟり住しゝ又為守注ゟる和の血文を
順誉とゝふ者造立ゟる石碑ゟ相續ゟ往しゝ下國の時武蔵
岩附よ住しゝ為守ゟ生ゟる名を津戸次郎為広と号を文亀年
中菅原孝標常陸介よ従しゝ下國の時武蔵
國の總追捕使扶父権守平重経ゟ嫁しゝ一子を生ゟる名を津戸三郎
為守と号を文亀年中菅原孝標常陸介よ従しゝ下國の時武蔵
國の總追捕使扶父権守平重経ゟ嫁しゝ一子を生ゟる名を津戸次郎為広と号
其三男為守ゟ生年十八歳ゆしゝ治承四年八月石橋山の合戦よ
馳参しゝ軍よ忠を顕しゝ頼朝公の旗下よ属しゝ数ゟ軍よ名をあけをとゝいふ

建久六年二月 鎮都東大寺供養の為将軍上洛ありし供奉して同三月洛中へ入同十一日法然上人の庵へ参り念佛往生の道を善りて忽ち佛法名をつく〳〵頂戴し同十八日結願の夜娑婆世界の住居無益なりと高声に念仏し初夜より自腹かき切五臓六腑を取出し陳大口より包忍ひ後の河へ捨させよとありしかども苦痛もなく十九日に至りても猶臨終の心地かなりしかば人皆奇異の思ひをなしけり翌廿日の夜明ぬれば息男部民部太夫守朝より使を以て此事を告ぐるかより始めて人も知りぬ翌廿一

芝崎

普賢寺

境内ホ延文年間ノ備ヘル所ノ六面ノ石塔ヲ存セリ

いふ靈澤に當寺はあるとも其墳墓の所在をもしらず
佛殿惣門の内ふあり本ぞんハ釋ゐゆゐして座像三尺余あり服七
文殊普賢二尺斗共ふ作者をあらす
其記ふ平重能平義親
平高親等の名を記せりとぞ
五十嵐市左衛門感状曰

景虎陣ふ於陣ふ砌三田彈正忠政定先陣而大幡く
陣所八王子塚を北条氏照と及一戦候ふ所五十
嵐市左衛門竹田新八郎ト云武士ヲ討ふ二番着到
賞功不跡時芝崎三十貫文所ヲ被仰下者也
依るゆ件
永禄三庚申年三月七日　立川宮内亟能在判

開山大定禅師真像座下之記曰
彩色啓端造立助縁芳衛辨翁啓範宗來啓一宗華
宗義啓端宗順啓勝宗範啓壽壽性了宗宗帙翁
塗師行盛佛師上總法橋朝宗幹縁比丘啓達
應安三年戌十二月三日敬記

當寺境内北の方ハ往古立川宮内大輔某の宅地たりしとなり
數年合戦の地ゆゑく今猶林中ふ首塚と称するものある八雫謂り
と云今も墳の跡と覚しき地存しそ矢の根の類の武器を掘
あり又慶長の頃立川兼賀なしゆる人ありこふ云宮内大輔
一族ハ其豊太閤の朱章あるを以く當寺天叟宗祐和尚
御開國の砌寺領をも奉り朱墨をもつふ又宮内大輔為討伐
佛閣を放火なしゆゑ静謐の後ハ修理もくくとある證状をもつ
ゐ事を愁訴もる旁ふ御加増あくき
後住持覚栄宗理天叟の弟子
旨被仰下とのへとも遅く
途中迂化せり後久しく無住の寺となり朱章を欠と云然るふ
寛永の末住持大年といへる僧當寺ふ住せしふ故ありて廣福寺
とへくふ退去せしと什宝の古文書古器の類を悉く持し去れや

と云ふく今ハ寺の朱章を傳へ存するのミ

日本年代配合鈔曰
永正元年甲子九月廿五日立河原於山内顕定扇谷上杉朝義合戦朝義軍敗テ太田下野守為ㇾ始多兵死ス

南朝紀傳康正元年己亥正月廿一日鎌倉成氏と房顕ハ定政上杉長尾景中と武州立川原小田原記云永正元年甲子九月廿七日駿河の今川氏輝并小田原の松田左衛門尉連合戦云〻

加りくれハ此勢を合せく扇谷の五郎頼良大将軍としく武州立河原へ陣営を布山内の管領上杉民部大輔可淳入道并ニ當屋形憲房東八州の軍兵を催し押寄たくあくり夜ふ入くれハ山内の加勢とし越後の軍勢させ来くれハ朝良あ〻ふかけ〻そらもくく河越の城ま落延梅酸の渇をやせむこう

卵塔の中ふあり高サ六尺ゟ一片の幅一尺五寸あまりの六面塔六面の石ハ一片〻ふ墓石とを穿ちく立合せくるものなり前面の二枚ゟ金剛密迹の二王を彫刻し後面左右の四枚ハ四天王の像を刻せり上の方ハ何れも宝尽のくさ〻ものを鏤てもありくる多常の石工のなしかるものふあらす極めくく妙作なり増長天の一片ふ年号等を刻せりも文左のごし

延文六季辛丑七月六日

施財性了立
道圓刊

按ふ前ふ挙ㇾ所の開山大定禅師肖像座下の記文ふ性了の名あり六面塔の財主性了なるべし延文六年ハ康安と改元の年ふ應安三年ふ至ㇾ迄ろうふ十年なり然れハいよく此人なるべし

普濟寺境内六角古碑　高サ五尺三寸　巾一尺四寸計

那羅延堅固

密迹金剛

増長天王

多聞天王

持國天王

廣目天王

當寺境内の地ハ多摩川の流ゝ臨ミ勝景の地なり富士箱根秩父郡の遠嶂等一望ゝ遮り尤幽趣あり北の方ハ往古立川宮内大蒲原の北条幕下なり〳〵五十嵐小文治との〳〵る人も此地ゝあり〳〵由土人云伝へ〳〵り前ゝ顕せし永禄三年の感状ゝと五十嵐市左衛門とい〳〵る名を注し〳〵り何ゟも其氏族の徒なる〳〵此故ゝ今も此地に五十嵐氏の人尤多〳〵おのまり伝へ〳〵る歟

八幡宮 同所二町そろも北の方ゝあり神主宮崎氏奉祀を祭神本多別命一座相傳建長四年癸子八月十五日勧請せりと云本地佛ハ阿弥陀如来ゆ〳〵く黄金仏像丈四寸八分ありく弘法大師の作なりといへり

天正年間野火のゆゝ神殿烏有とあるより此時ゟ至り年ゟ失

立川八幡宮 諏訪社 満願寺

あひく其所在を知る人なし仍此地の領主立川宮内某の室
此ことを歎き深く歎き悲み新に弥陀像一軀を鋳く當社に収らること
いつれの頃にや佛躰の背面に鐫所の文次の如く記せり按に新像の膝ま梅鉢の紋あり
疑ふらくは立川氏の家の紋ならんか欤或は其室の家の紋ならんか欤
其後宝永年間宮社を造立せんとせし時境内松の枯株の根を
穿ちく鋤下に失ひ所の本地佛金像の弥陀如来を得たりし時の鋤
の跡まる像の又安永五年の夏賊の為に奪ひ去られしとも霊威ある
事なり
以同年八月四日再當社に還座なりとぞ

天正年間新造立所之本地佛之銘曰
武州多東郡立河郷芝崎村八幡本地并與願主
立河宮内お孫ろ
于時天正拾四甲戌年三月十五日
本願大夫式部
大工推名土佐守

後光鏡之銘曰
武州多磨郡立河郷芝崎村八幡宮 鏡一面
爲家内安全
元文四年己未八月

醫王山萬願寺 同所南の方四十歩計を隔て黄嶽巽の禅崖
にそ錬牛禅師居住の草庵の旧跡なりしを後に一宇の蘭若と
なせしとぞ本尊薬師如来八座像三尺計恵心僧都の作ゆゑく
脇士ふ日光月光十二神将等の像を安せり

額 本堂向拝に掲く南部悦山筆

醫王山

額 堂内家帯に掲る當寺中奥那高泉の筆なり

東光院

聯 左右柱の掛る黄檗

[illegible]慶悲尓大地甘露滅
[illegible]定垢浄通法界悉獲益

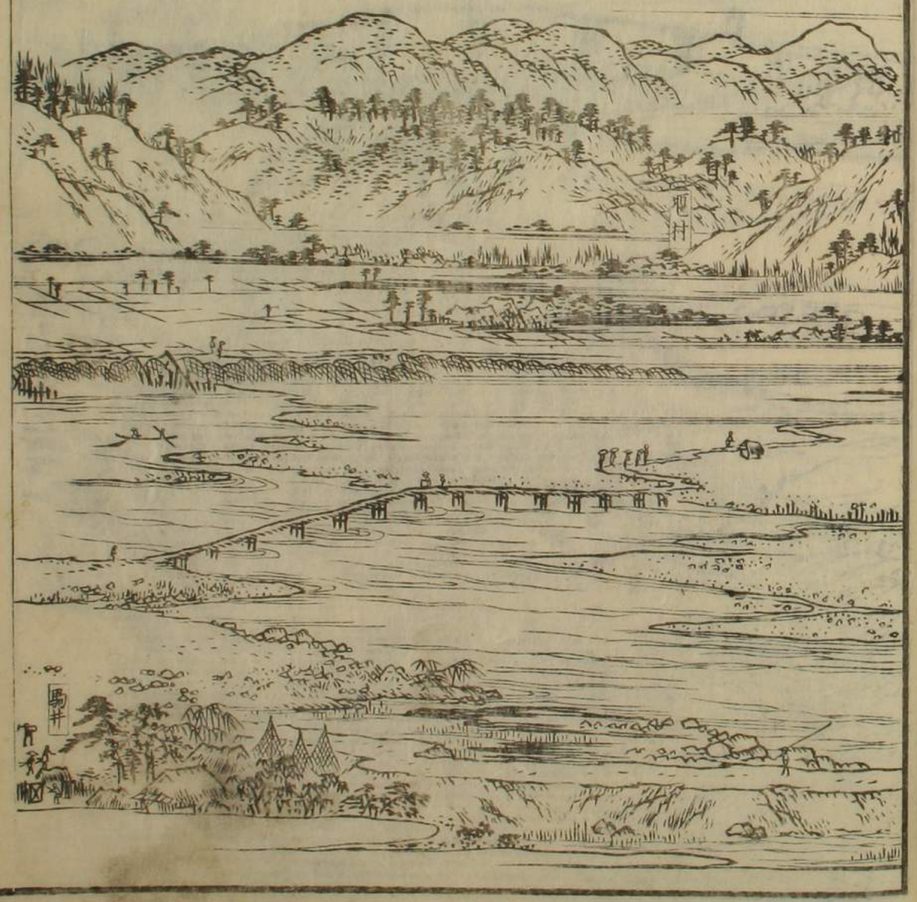
諏訪社 八幡宮より六十歩斗東にあり祭神建御名方命一座相
傳ふ弘仁二年辛卯七月廿一日ふ勧請せしとぞ當社も宮崎
氏奉祀す

多磨川 當國第一の勝景とす和名類聚抄多磨ふ作り太婆と訓ず
篇多摩とす後世玉ふ作るものゝ萬葉集多麻ふ武蔵國風土記残
所の玉川と共ふ山城摂津ひ紀伊近江陸奥等の國くまある
此川ふ武州の秩父丹波山ふ発し多摩郡の丹波村ふ添て流る古ふ多波川と
ひくるなり日蓮上人注画讃大士臨終の時此上ふ移ゐ給ふ武蔵國田波河

多摩川
六玉川の内
かくれ川今多摩と
改る

高尾山
府中
矢の口渡
中の島

玉川ハ砂場廣
潔ゆゑて其流れ
一帯まあるす多く
雨後抔ハ渡口
杪縛して定まり
あり西北は秩父
をよひ甲州の諸
山を望み東南ハ
堤塘の斜よ連る
を見る鮎を仕川
の産とす夏秋の
間漁人絶せ
ず常



其二

玉川の獵師

若道恩幸

たはくれや
さくらす
はるかぜ
郭公城
ほとゝぎす
名川の里
定家

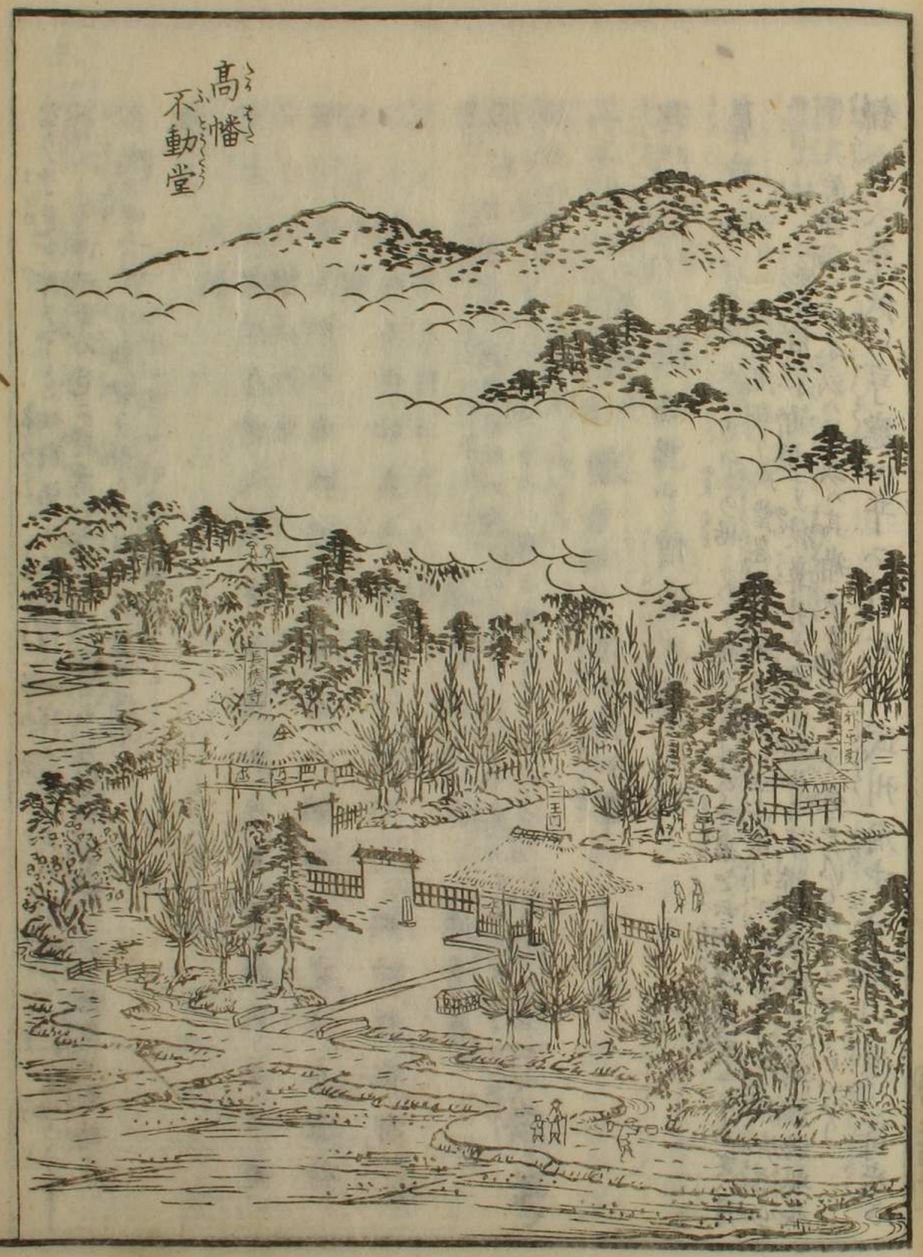
武蔵國風土記曰　多磨郡　多磨河
出諸鮮及鵯鵜等亦里人作調布納内蔵寮云云
東鑑曰仁治二年辛丑十月二十二日丙子以武蔵
野可被開水田儀定訖就之可被懸上多磨河
水之間可為犯土之儀状云云
撰集武蔵野ヨ水田ヲ開キ又多磨川ノ水ヲ用水ヲ引
此河ハ武蔵野ノ勝景ナリ　権輿
多シ以東ハ平地ニシテ長流ノ徑ヲ不往ト観ヲ改メ亦勝景ナリ
あら〳〵點ヲ以テ此川ノ名産トス故ニ初夏ノ頃ヨリ晩秋ノ頃迄
都下ノ人遠キヲ厭ハズ来テ遊猟セリ
高幡山金剛寺　高幢邑ニアリ　東鑑ニ高幡三郎ト云人ノ
名アリ此所ヨリ出ル
ゆゑ花洛三室院御門跡ヨリ属ヲ大宝ヨリ　新義ノ真言宗
其後弘法大師再興ストイフ　本堂不動
明王ハ古佛ニシテ座像一丈餘アリ　作様詳
脇士二童子化人ノ作ナリトソ

水源ハ甲州丹波山ヨリ發シ　田舜義章ノ武蔵野地名考ヨ
入ルヿ八日原川ヲ會流ス　多摩郡日原山小菅山等　當國多摩郡
青梅ノ南ヨ傍羽村　御嶽山ノ麓ヲ経ル
ゆく秋川ノ流モ落會ヒ　甲州境ノ地ヨリ發シテ多摩郡伊奈村五日市
又石田ト云ヨ至リ浅井川モ會シ　村ノ邊ヨ傍テ流ルヽヿ
地ヨリ末ハ多摩蒼原橘樹三郡ノ間ヲ東流シ海ヨ會セリ　橘樹郡
登戸二子小杉平間河崎等ノ地ヨ傍ヒ荏原郡ハ瀬田等ヲ
羽田等ノ地ヨ傍ク流レ甲州國境ヨリ當國多摩郡羽村邊
六鄕迄十六里ト云武蔵野地名考ヨ周流モノ凡四十里トアルハ水源ヨリノ行程ナリ

万葉結
多麻河泊尓左良須氏豆久利佐良左良尓奈仁曽
許能兒乃已許太可奈之伎

拾遺愚抄
此詠ヲ拾遺集ニ入レラレシヨリ人モテハヤスヿトナリテ
サヽラクハミムロノヤマノヒメツヽジ
ヲリテハヽヽヲツヽミテムカヘヨ
多摩川ノ里　定家

高幡不動堂



なり予是を作らんと住持諾す依て僧ハ一室ゟ入く戸を閉敢て戸外ゟ窺ハず其方を云ず室の地ゟ稲荷を勧請す不日やく造功畢ぬ竟ゟ興尽ハ去て
古鰐口一口　不動堂ゟ懸ル径一尺九寸文字
九十四字を刻す銘左のごとし

敬白　奉懸
右尋當寺者慈覺大師建立清和天皇御願所第二建
立斗円陽成天皇奉崇八幡第三建立永意得
彼時頼義朝臣自於登山行窒両檀
大檀那美作助真并記氏一宮田人鍋師源恒有
文永十年癸酉五月廿日　銀念西守氏　鐵青蓮

服石　不動堂の後愛宕祠の傍にあり巾六尺ゟ高サも五六尺ゟ有ル巨石を拝ゟもハ穢ゟ厭ふ忌明の時土人此石ゟ請て
後諸の佛神ゟ奉祠すとぞ
二王門　左右ゟ金剛密迹の像を置ゟ　額　高幡山　僧正泊如筆
惣門　二王門の左ゟ右ゟ入　額　高幡山　僧浩然筆
鼻井　庫裡の前左の方の山の裾ゟ湧出ル清泉ゟ有ル四日の夜大風発り声堂忽ゟ顛倒す故ゟ平地ゟ引下ゲ鼻井と称ス一阿伽とす諸人寒熱の二病腫物眼疾
等其餘諸病ゟ飲ゟ或ハ其痛所ゟ塗りて平愈せざるハなしとぞ
鎌倉大草紙曰享徳四年正月廿一日武州府中分倍川原へ寄来る
成氏五百餘騎ゟく馳出短兵急ゟとり切ゟき火出る程ゟ攻戦ひける
間上杉方の先ゟの大将右馬助入道憲顕深ゟ負ゟく引かゝるゟう
高旗寺ゟ自害ゟ鎌倉勢ゟも勝軍ハさゝれとも石堂一色以下百五
十人討死ゟく戦ひ疲ゟ分倍河原ゟ陣を取云ゟく　高旗寺とゟ當寺
縁起曰平山武者所季重幼ゟより當寺の不動尊を崇敬ゟ世ゟ強
勇の名を顕せり治美の頃平家追討の時ゟ鎌倉の右大将家ゟ
厭ゟ義経ゟ随ひゟく西國ゟ趣き一の谷ゟ勇を揮ゟ武名世に
明らけゟ故ゟ平ゟ後當山の頂ゟ此ゟ堂を建立ゟ然ゟ建
武二年乙亥八月四日暴風ゟ罹ゟく殿堂破壊ゟ依て後平
地ゟより引ゟ其頃ゟ財主ハ平助綱ゟ大中臣女等ありとぞ
しかるとより其威霊ハ救拳ゟの諸災あらんとゟる時ハ佛躰汗ゟ生
ずと云ゟ
木切澤　金剛寺より半町ゟる西の方の谷と云平季重持堂建立
の時此所より堂材ゟ伐ゟ出ゟと云ゟ

番匠谷　同一町西へ入谷を云是も季重卿堂建立の時番匠の部彫の地なりとぞ

別旅明神　金剛寺より三町ばかり東の方別旅邑よりく此地の産土神とす則金剛寺奉祀の宮社なり傳へ云金剛寺の本尊不動明王の脇士二童子を彫刻せし異僧その像を造り終るの後立去らんとす近里の道俗喜悦のあまり其跡を隨ひく此地まで来りるゆ件の異僧ハ忽ちかくれなり貴賤奇異とし此地に一社を建立し別旅明神と称す地名も又別旅邑とぞ

平惟盛之墓　金剛寺より一町ばかり西南平村平山村隣村農民又右傳つとめる人の構の中にあり青き一片の扳石やゝく高サ七尺五寸ばかり巾二尺程厚サ二寸許あり上の方よきりく字を彫下に文永八年辛未中冬日とあり土人相傳へ平惟盛の碑なりと云往古此地に平助綱と云武士住せし平氏の遠裔なるもハ惟盛の菩提を弔んとゝゆゑ是歟造るゝ年歴を知不審し或ハ又助綱ゝ墓なりとも云同し南の方二町ばかり山を

登ること中腹ゟ又古碑あり剝落して讀ること叶ハず只矛の一字のみ鮮明なり高サ六尺餘を巾二尺そのうち下ハ土中ゟ埋む所を餘古石塔二基有りとも高サ四尺ばかりありて土人平山季重或又平氏の人の墳墓ともを云傳へしが分明なることす此所ハ農民平氏某の家累世の此地邑名を平と称し殊に平氏の人多し里正平の家ゟ小田原北条氏直の下し文あることなり

慈岳山松蓮壽昌禪寺　高幡より十二町許東南の方百草邑にあり（昔ハ戸張義家兄弟奥州黄檗派の禪林にして江戸白銀の瑞聖寺ゟ属せり昔ハ天台宗なりしが井山と号し増城とす）

天平年間道璿の高弟釋道慶大勧進して始て七堂全備の精舎を創建すと後康平五年伊豫守頼義奥州下向の時此地をとのきりありし松蓮寺ゟ投宿して八幡宮を再興ありしが朝敵追罰の御祈願ありて又建久年間頼朝卿以来源家累代の祈願所ゟ定られ建長七年當寺の住持祐慶相州ゟ琳長師を請じて禪院ゟ改むと云ふ慶長十五年松蓮寺方丈建営の棟札あり脇士ハ阿難迦葉の立像三尺なり佛師藤村中圓彫造と所なりと云（中圓ハ華人ゆゑにありしとなり）

像三尺斗あり脇士ハ阿難迦葉の立像三尺なり佛師藤村中圓彫造と所なりと云（中圓ハ華人ゆゑにありしとなり）

号せり　享保六年辛丑八月廿四日小祝　享保二年丁酉大久保加賀守忠英建社

夫人壽昌院殿慈岳元長尼中興開基ゟ

三宝を崇敬して竟ゟ當寺を再興　本堂（元長尼ハ享保六年薙染して壽昌院慈岳と称せ常ゟ當寺ゟ四十五才の木像あり）

大宇及ひ總門額慈岳山等ハ何も中興開山明慧極の筆なり

本堂の前ゟ揚ること紫金光の額ハ隠元禪師の書なり

経筒　三箇其銘文左のごとし一ハ銅を以製す長九寸二分口廣さ四寸五分

長寛元年歳次己未十月十三日庚午

工匠藤原守道

茂草松蓮寺

大勸進聖人僧辨豪
結緣者僧玄久
僧觀賢
如法書寫
僧定円
僧瑞久
僧定阿
僧尭尊
奉納妙法蓮華經
僧辨意
駈仕僧樂西
不次延延

同一筒 銅を以て製す長七寸五分口廣さ渡り四寸一分其文左のやう

大勸進
僧尭尊
大檀主藤原氏満貞刋
永萬元年九月十七日天
其蓋裏曰
大勸進所百草村
松連寺

同一筒 金銅を以て製す長五寸口渡り三寸一分其文左のやう

奉
鈞命
日本幕下
建久四年 一宮別當
八月 松連寺
修之

八幡宮本地佛阿弥陀如来像 金銅一尺四寸あり土中出現の物にして佛躰の背よ鐫所の銘文あるも左の如し

敬白治磐金銅影像法体弥陀座光三尺六寸
為皇帝日本主君當國府君地頭名主
御願円満安穏泰平信心法主子孫平安
悉地成就師長父母乃至法界
同共往生多西吉冨二親巨魂助成合力
大歳庚戌孟夏之天建長二年
七日壬子南閻浮提
日本武州慶祐敬白
願主源氏真慈悲寺

投る當寺の弥陀佛背面の銘文は真慈悲寺の号を注せり東鑑文治二年二月三日の条下よ武蔵國真慈悲寺ハ御祈祷の霊場なり処りとぞ

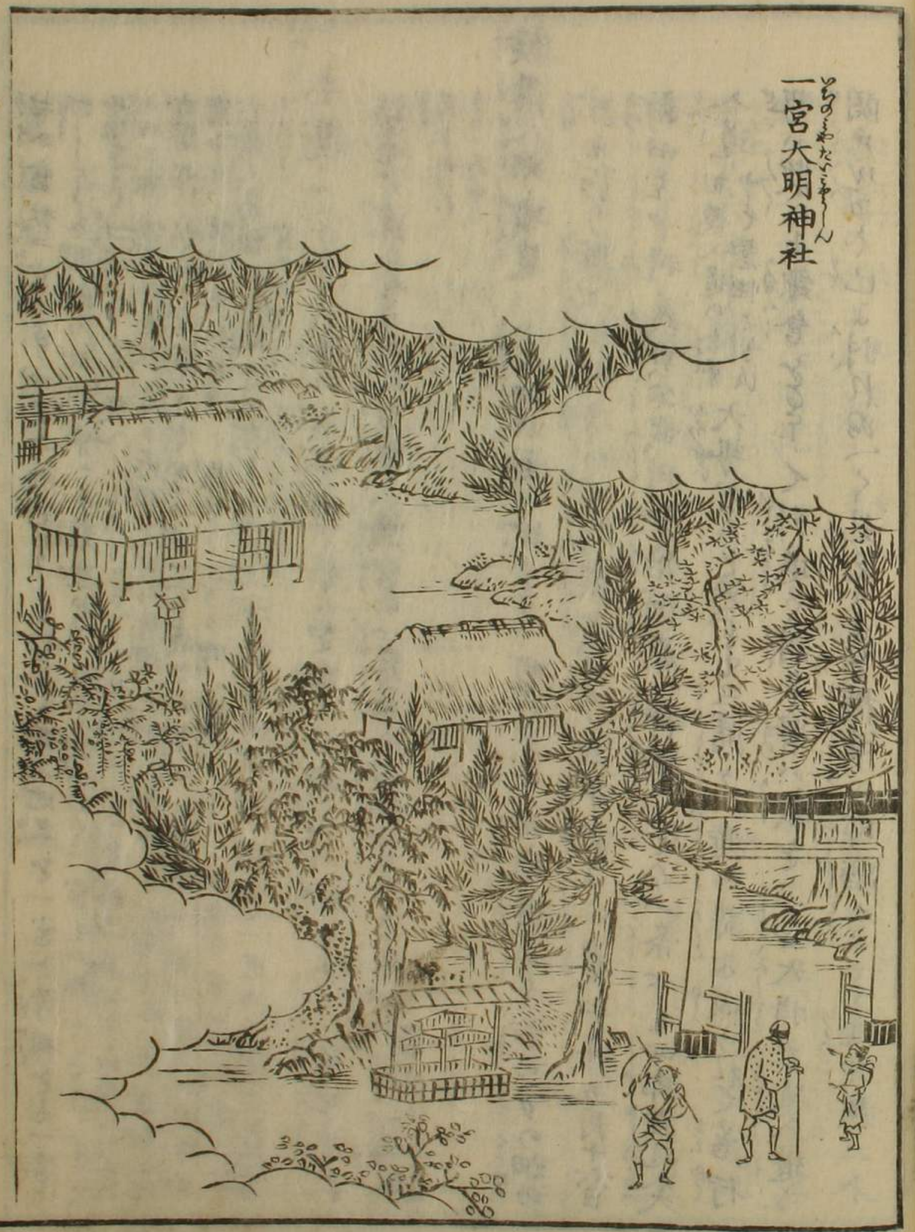
とも云ふ莊園寺院なるゆゑより仏供供具の備なく僧ハ衣鉢の具を失ふ
多し今日教上人當寺より一切経を安置し破壊を修理せらるゝの旨
申請の御院主職を補せらるゝ事を南都堂より又同書建久三年五月八日の条下ゆを
法皇四十九日の御仏事を南都堂にて修せらるゝ百僧ハ真慈
悲寺より三口とあり又同書治承五年四月北日の条下に小山田三郎友成多
擧郡内吉富村宮遷光寺等の地を自の所領ハ違しかとも真慈悲寺ハ今の頃廃せしめ
吉富ハ此辺かからと拠ハしかれとも

八幡社記曰建久四年鎌倉右大将家法華経を書写し金壺に入て當社へ納
其書写せる所の打紙法華経の文字多くハ打殴しく僅に残るのみ
井 常に是を掬せむ清泉もと本堂の後の山麓にあり寺中
八國見 山 本堂の後の山の上にあり此所より東南五丁そなたに
二王塚 松蓮寺より東南五丁そなたに此号ありと
林 あるのみ地名なり繁茂せし地をさして名とす又宝蔵と唱ふる所の
存せり古大伽藍ありしなるべし今松蓮寺の北の経筒
八分の観音の像なるべし石槨打破りて中の石棺を露はし
を得たりとぞ

百草八幡宮 松蓮寺より西の方山の中腹よりなり則松蓮寺奉祀の
宮なり毎年八月十五日を以て祭辰とす本社向拝の額八幡宮 弘三
字ハ梅小路大納言定福卿の筆なり寺僧曰正殿ハ安置せる所の

神躰ハ八幡宮神宮王仁津戸明神武内大臣義家公等の木像
なりと云相傳東平五年源頼義義家両公奥州の夷賊征伐の時
山城國男山正八幡宮の社檀の土を穿らて石槨ハ盛来り一宇の
社を造営して此地よ勧請なしたまひ願書等を収めらる其後凶
徒悉く平け凱奇の時再此地ハ至りたまひ金銅の観世音の像
をも安置し永く祭祀を不朽よ傳へんとて下ハ詳なり又此時五百
石の祭田を寄附且両将軍の随兵等も各軍功を祈り帯する処の
刀杖を収め神徳を謝し奉ハ来鎌倉頼朝卿當社の神を崇敬
あひ建久四年法華経を書写しまつり金壺よ入て奉納おはりぬ
星霜を経く件の宝器散失せしを正徳年間二王塚の地を穿て
再ひ是を得しとぞ寺僧云當社境内の樹木枯ると後ハ悪く
奥州の方へ向く倒るゝの昔より今よ至るまで是當社社
一奇支しと云

一宮大明神社



一宮大明神社　百草八幡宮より十五六町北の方多摩川の南岸一宮村にあり一里あまりを隔つ六所宮より八西南に祠宮新田氏大田氏両家より奉祀を祭神八天下春命なり後瀬織津比咩及び稲倉魂大神を合祭して三神一社三扉とす祭神今八小野神社よ同し此葦原の中津國ゟ降臨しまします時輔佐として隨駕しまする三十二神の其一神ゆゑに即三十二國ゟ分降ゐます時信濃國へハ天表春命武蔵國へハ天下春命降臨なゐし國を向きまゐ

とうえんえんきょく

社司相傳神代の昔當社下春命此地の止まりたまひし跡或ハ又國の祖の神後ふ國造神たちこれを祀てあるひハ今六所宮社傳ゟ一宮下春命小野宮村小野神社へ遷座ありて倉稲魂命と共ゟ合せまつりて又六所の宮の相殿ゟ遷しまつりし時世詳なゐす然れ成務天皇の宇國造兄多毛比命武蔵國多麻の地ゟ府を定めさせたまひし一宮ハ開國の祖神小野宮ハ同郷の旧社なるゟハ疑ひなし

按ふ當社一宮の事旧史ふ所見なし既ふ地名を一宮と号称しまた国の祖神第一ふ鎮座なれば一宮と称しまた東鑑治承五年四月二十日小山田三郎重成平太郎貞ら所領を自の所領を注し加へ云々吉冨荘一宮別當松連寺と銘せり其の地名を載せ百草村松連寺所蔵の建久四年の経筒ゆそ一宮別當松連寺ふ存する和の文永十八年の鰐口の銘ゆも一宮田人鋼師源経有と有り又高幡村金剛寺ふ存する和の文永十八年の鰐口の銘ゆも一宮の地名往々見あり

一本擬一宮より南の方半町そかりを隔て耕田の中ふあり樹の木ふ注連を繞らせり土人百草八幡宮の一鳥居の旧跡なりと云此所より百草の八幡宮へ八町間

几十町そ

横溝八郎墳墓　小山田旧関の地より一町あまり西南道より右の方の畑の中ゆあり塚上松槻等の老樹繁茂せり太平記ふ正慶二年五月十六日新田左中将義貞公武州分倍河原へ押寄その条下ふ四郎左近奏入道相模入道の舎弟ふ慧性と号し大勢なりとも勢ハ散々ふ鎌倉をさして引退く討る者ハ數を不知大将左近入道も関戸辺ふて已ふ討れぬと見えそれを横溝八郎踏止りて近付敵二十三騎時の間ふ射落し主従三騎討死を安保入道道堪父子三人相隨ふ兵百餘人同扰ふ討死を其外譜代奉公の良従一言芳恩ゆ軍勢共三百餘人引退し討死しける間ふ大将四郎左近入道ハ身悉なくくく山内迄引れそれとも今ふ安保入道父子の墓も此辺ふ近き構の中ふ古墳あり上ふ樋の古樹茂れりとも今ふ関戸入口相澤氏の墓の印ありそれとも何人の墓ふ相澤氏の説ふ安保入道の墳墓ふ則これなり

小山田館址　今関戸と称するところを旧址なりと云扱ふ此地ふ天守臺と云所あり此頂より眺望ふもとハ多摩川の眼下ふ玉川の流を平臨し又遥ふ上下野州近一望ふ入南岸よりひく古府中より帝都及ひ鎌倉への街道あり東奥北越の二道共ふ此地を往還せるハなり

小山田八荘の名ゆしかり今ハ邑名ふのミ地も昔ハ同一庄内ふありしかり今ハ邑名ふのミ残れり此所より二里そかりを南の方ふ小山田村と称するこれあり

大永抄

多摩郡

六百番寺合

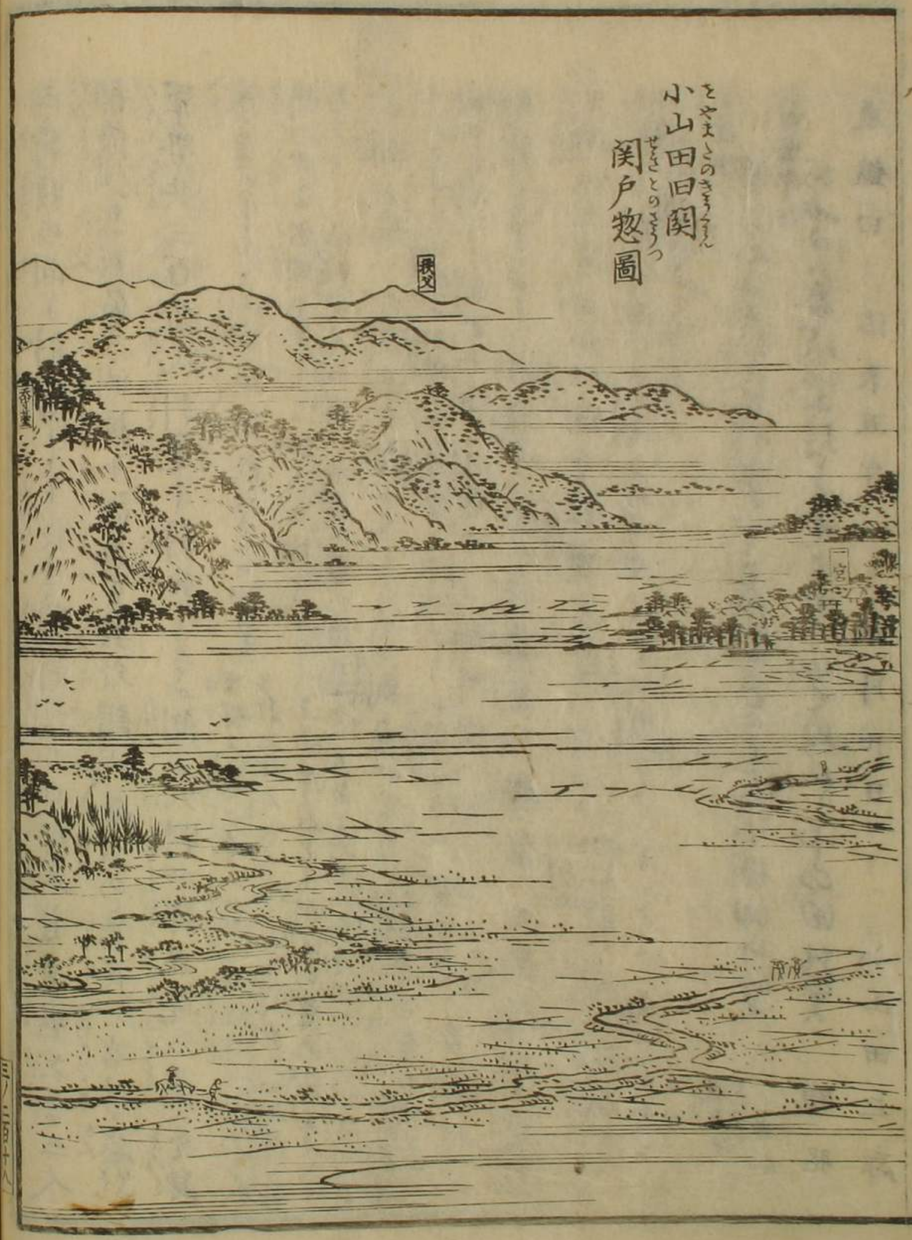
或為世

ひとりハ菊代ふ引ふ仕へそそこふむこと

ひとりハ菊代ふ引ふ仕へそそこふむこと

東鑑曰　治承五年　四月廿日　小山田三郎　顕昭

小山田田関
関戸悠圖



六百番哥合

重成聊背御意之間成怖畏篭居是以武蔵國多摩
郡内吉冨并一宮蓮光寺等注加所領之内去年東
國御家人安堵本領之時同賜御下文訖而為平太
弘貞領所之旨捧申状之間糺明之處無相違仍被
付弘貞也云云

同

書曰　建暦三年　十月十八日　以宗監奉
尚為武蔵國新開實撿被遣圖書幷清定奉行云云

按ㇾ東鑑ㇾ我ㇾ家の武蔵國の新関ㇾ地名ㇾ注ㇾ
載ㇾ其一ㇾ小山田弥三郎ㇾ小山田庄ㇾ
成瀬高坂森河田真光寺鶴ㇾ
金井大倉ㇾ地ㇾ領ㇾ由注ㇾ
善三ㇾ
田庄ㇾ
小山田庄ㇾ
家ㇾ古文書ㇾ
證状ㇾ
芝原田地ㇾ
又三ヶ関戸郷市ㇾ
関銭五貫文有山源右衛門ㇾ

其地関ㇾ後加ㇾ
自擬令ㇾ
付ㇾ

ㇾ九月廿三日

有山源右衛門尉

憲秀
花押

此地ハ昔鎌倉時世関を居られる旧跡ゝ建久の頃か鎌倉の
右大将家浅間三原及ひ入間野等へ御狩其餘陸奥上毛信濃越
後等へ軍を發しある時ハ必しも関戸口の大将を定られしる諸
書ゟ我ゝ太平記ゟ正慶二年合戦の条下ゟ義貞数箇度の戦
ひゟ打勝ぬひぬと聞えしゝハ東八箇國の武士とも順付す雲霞の
如く関戸ゟ一日逗留ありく軍勢の着到を着らるゝゟ六十萬七
千餘騎とそ注ゝるとあるも此所のゝなり

延命寺　壽徳寺ゟ三四町南の方道ゟ右側ゟひり地蔵院と号
時宗ゟゝく相州藤澤の清浄光寺ゟ属せ本ゟ地蔵ゟハ立像一尺
五寸ゟゝもあり作者詳ゟゝ開山を普國上人と号す門ゟ入口

きこと
関戸
てんしゅかく
天守閣

右の方畑の傍よ椹木の老樹を以印とする古塚あり正慶二年
武蔵野合戦よ討死せし四百餘人の墓なりとぞ
城山　延命寺の後の山續をいふ土中柿よ古瓦を得ることありす土人云昔小田原北条家の幕下関戸
駿河守とかるゝ人ここふありとも又ハ永禄の頃佐伯市助道永といふ侍
武士小田原の北条家よ仕へ此地よ住せるとぞ故よ此所を佐伯谷とも号けしとぞ
明徳元年庚午念阿護法入道此地よ一寺を創建ありて吉祥山
壽徳寺と云禅院を再興もより右側まわり此寺ハ関戸入口道道永自ら中興開基と
なり日舜宗恵大和尚を請じ中興開山とす市助法名を道永と称せし永禄十二
年己巳二月三日陸奥ふ戦死せし道永の子孫三河守道也和泉守道安同隼人
等皆此地よ住ゐる人なり後ハ代々此地より徙りて他所よ住ゐるとぞ
天守臺　同し山續西の方よあり城山の半腹より曲折して山頂よ到る
まて老松繁茂す此所より四望をるふ尤絶景なり　近頃山頂よ金毘羅
権現の宮を営建せり

沓切坂　下溜戸の宿の南の坂を云坂の上を古市場と唱ふ昔商戸
駅舎ありし地なるも天正已来此地の古道廃して今ハ名のみとな
りさるとも府中より横切りて相州矢倉澤大磯等への官用の欠
場なり　相州大山石尊富士詣抔常州野州辺より此道ふかり
合戦の時新田義貞公脇屋義治公始ふ二百餘騎ふ討ちかれ御方の
勢も散々ふ行方ふくれなりしハ迚も討死をせし命をしハ鎌倉へ
打入らん足利左馬頭基氏ふ逢ん命を失ハんよと夜半過る頃関戸を
過ぬひそかふ石堂入道三浦介等の五六千騎の勢ふ出逢ふ仏神
奈川を経鎌倉へ打入勝利を得ん頃此坂より馬の沓をそゝ
きたせゆゑふ打ちやぶりを依て名とすとぞ

赤坂臺　関戸より十六七町東の方蓮光寺村を横きりふく赤坂と号
く坂を登れハ赤坂臺なり一里半斗を経て河原谷と云地あり

平臺　赤坂臺の東の續をいふ此所ふ三圍よありふる老松一株あり

土人甚兵衛松と字を此地ハ矢の口よ屬す

騰雲山明覺寺　矢の口村街道より南の横よ切て渡し場の南拾五町

あり古も臨済派の禪林やゝ鎌倉建長寺よ屬也本ゟ釋迦如來ハ

唐佛やゝ座像八寸ばかり立足利義晴公建立なり

佛刹やゝ其後廢寺となりしを慶長年間加藤太郎左衛門再興

して菩提寺となるよと云中興開基ハ揚雲和尚永禄四年よと号當寺に

長坂血鎗九郎陣中守護の為鎧の中ゟ竜ゟ伽羅の正

觀音を安置せり立像三寸ばかり弘法大師の作とゝ今ハ一尺斗の

正觀音を彫造して躰中よ祕安せり

小澤小太郎居宅旧地　當寺境内の辺を云今猶馬場の旧跡なりと

称する地あり又當寺の前よ小高き岡ありく截地下と号く頃

兵粮を収る倉の跡なりと云　此小澤某の名ハ其下ゟ小澤の城址の

艸原山威光寺　同所明覺寺より道を隔て一丁斗向ゟ側二丁斗左へ

入ゝあらゝ新義真言宗ゆゝ坂濱高勝寺ゟ屬也本ゟ大日如來

座像三尺ばかり當寺ハ穴澤天神の別當なり

悉く焼亡しく旧記を亡せり

東鑑曰　治承四年庚子十一月十五日

武藏國威光寺僧川相秉之僧坊領如元被奉免之云　同　四月十三日

書曰元暦二年武藏國威光寺主長栄懇祈日夜不怠然平家滅亡畢有御感沙汰之處為小山太郎有高被押領寺領之由捧去年九月所給御下文所訴申也　同　下畧

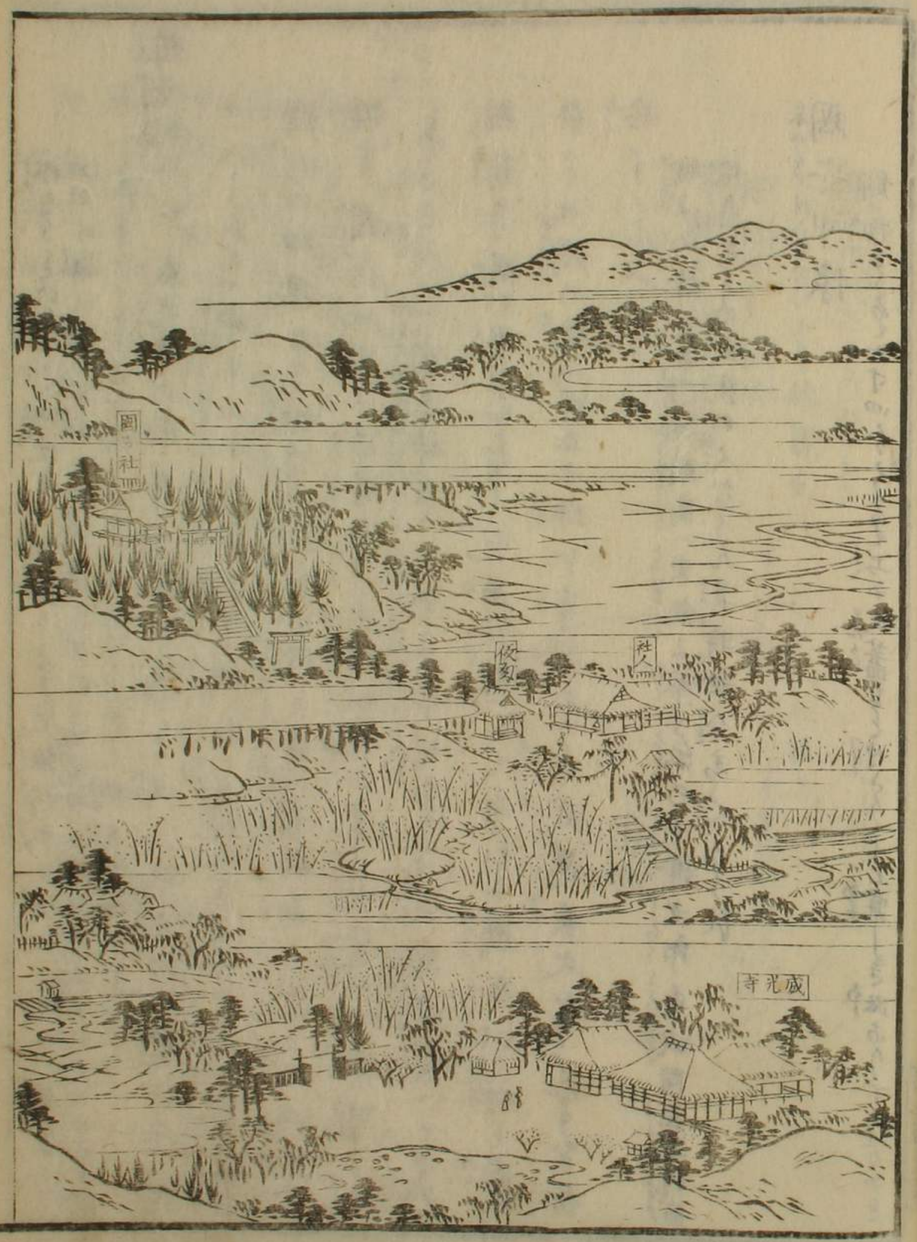
書曰治元年小山太郎有高押妨威光寺領之由寺僧捧解狀仍令停止其妨任例可言上子細之旨被仰下惟宗尚橘判官代以下畧

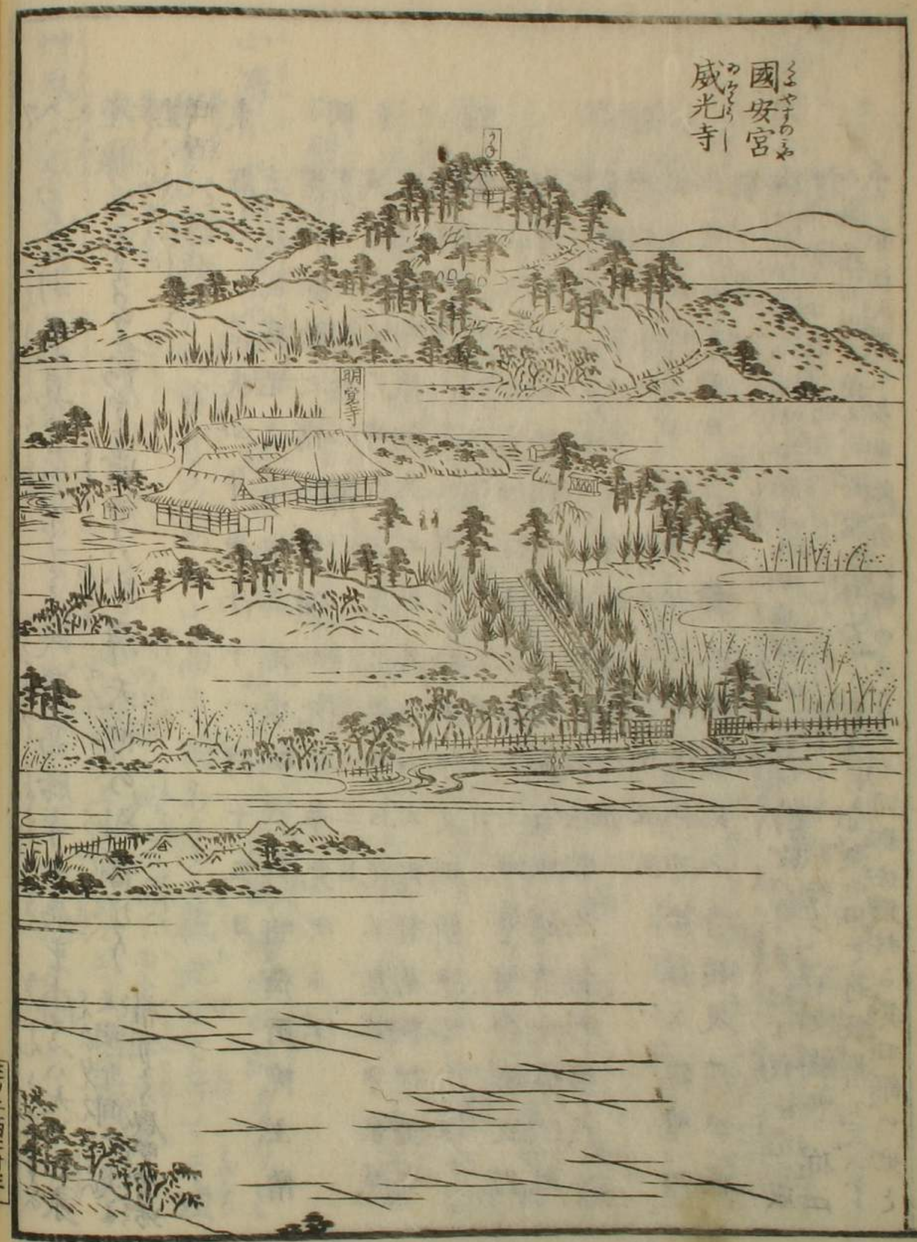
廣藤判官代邦道等奉行之　同

武藏國威光寺主僧円海泰訴曰柏江入道増西五十餘人悪黨乱入寺領及荊田狼

（江戸雜司谷鬼子母神の別當威光山法明寺を以く東鑑よ載る所の威光寺ゟ田其寺ゟ云伝ふるとゝ恐らくゝ當寺の寺號の田を荊狼雑ゟ及ゝ誤なり）

（柏江入道増西五十餘人の惡黨ゟ乱入ゝあり柏江入道ハ多摩郡柏江郷の主なり今同郡佐須村ゟ其旧館の地と


岡社
社人
伏多
威光寺


くまやすのみや
國安宮
みやしろ
威光寺
明覚寺

祈ることのありく地より程遠からず東鑑州本は相江に作るは誤なり江戸の雛司谷は其間七里隔つへしされとも當寺は天明年間の火災ふ旧記亡ひ古を考へ合まくさたまりなし猶多日訂正をまつきのみ

國安明神祠　威光寺の南五十歩斗を隔て同一側左の小道を三十歩斗入るにあり神主山本氏奉祀す神躰は左のかきとのふねに世よ云所の鑄形の神像なり相伝へ往古小澤左由門尉國高とふる人此地を領す國高此地より逍遥ありしとき頃松樹の下より白髪の老翁現ゝ示して曰く我は大國主神なり此地より崇祀らは万民國安かるへしと云ふ國高寺興の思ひをなし宮居を営んでたてまつる國安明神と崇め祭る社領の地八百五十坪を寄附ありく武運長久なるんすを祈念すとぞ

按るに小澤左由門尉國高は東鑑よ挙るかの小澤次郎重政同左近将監信重なるの氏族の人なるん其時世今まくくに天蓋なと附くりしと覚しき跡あり下の方わを銅物にて六寸四分まるもよふ

花瓶のかきとのありく上の方まロあり神躰を僧形にかたく宝珠と劍とを持しの形なり

穴澤天神社　谷口邑威光寺より東北の方三町斗を隔て同一往還右の方小道を入てあり社は山の中腹よある此辺を小澤ゝ原と唱今祭神詳ならす後世菅神を合祭せり祭礼は七月廿五日なり又同日神樂を修行し九月廿五日は獅子舞を奥行を別當は真言宗にて威光寺と号を

延喜式神名帳曰　武蔵國　多磨郡

穴澤天神社云

穴澤神

谷之口
穴澤天神社
此辺傍を小ぼう原と号く
右社の後の山頂ハ小澤氏の
東武の往来より城趾の
文明の頃し金子掃部助
此城ハ檜の御りくを
古里宮内方迄の屑
下椚山より
切て此山迄
を築殺
すゆ
酒倉
なま
跡
水車

武蔵國風土記残編曰　武蔵國　多磨郡
穴澤天神　圭田三十六束三毛　田　荅安天皇
四年壬辰三月丙午祭少名彦神也云云

當社の麓を澗水流れ来て多麻川へ合せ其流を隔てゝ山岨より一の
巖嵓あり故よ穴澤の名あり昔の巖洞ハ崩れたりとて今新よ堀
穿てる洞穴あり洞口ハ二ツよ分てあり内ハ狭く内よ種々の神佛の
小澤城址　谷口天神の山續淺間山の西よ並へて東鑑よ元久二年乙丑六月
廿三日稲毛入道大河戸三郎ゟ為よ誅せらるゝ子息小澤次郎重政ハ宇佐美與
是を誅せんと又同書ゟ同年十一月三日小澤左近將監信重綾小路三位師季卿
息女を相伴ひ京都より泰着を行光を以て其由を尼御臺へ啓せ下畧又
同月四日夜よ入綾小路の姫君尼御臺所の侍亭ゟ泰ら御猶子として候
武蔵國小澤郷（稲毛入道領多し）知行せるへきの由何らゝとあり鎌倉大草
紙ゟ文明九年長尾四郎左衛門尉景春山内上杉の家務職を兼ら
さるを憤り逆心を企顕定を亡さんとて武州相州の内一味同心れ

兵を催し上杉家を襲ふ条下よ金子掃部助ハ小澤と云
城よ楯籠る間大田左衛門入道下知とゝく扇谷より勢を遣し同
三月十八日溝呂木の城を攻落せ同日よ磯の要害を責らる一日防
戦ひ夜よ入れハ越後五郎四郎ゟ城を渡し降泰せ夫ゟ
小澤城へ押寄攻ともせ城難所よ落ゝこし（中畧）景春一味の宝相
寺なゝ吉里宮内左衛門尉以下小澤の城の後詰として横山より
打出當國府中よ陣を取畧同年四月十八日金子掃部助ゟ篭ふる
小澤の城も貢落ませるものを

向の岡　今向岡と称ふる地ハ多麻川を北よ帯て西ハ関戸より發く
東ハ末長よ終るとの是なり連岡の長九六里あまり巾
或ハ云今向の岡と称ふる連岡向の岡ゟ限るを以て武蔵國風土記残篇ゟ
て考ふるよハ多磨郡北ハ向の岡よ限るをあらねとも地よあるへくゝ
然よ同郡秩山ハ南北東西五里尾山より八國山まて東
西二十里の連岡なり叫方共よ武蔵野中何ま方よりも岡よ相對ふる
故よ向の岡と称ふる地ハ都筑ゟ並とゝく佳
なゝんとあるゝれとも誤ゝ是をこゝふ挙るのゝ

武蔵國風土記残編曰
多磨郡東限草窪　岡西限金川南限華田浦北限向
岡云云

新勅撰　武蔵野の　小町
貲古今　武蔵野の　知家
玉葉　秋雲の　後一条入道
同　　定家
夫木　　為家
（家集）　後鳥羽院
（林名所考）　隆源
都筑の岳（綴喜或楸小佛の嶺より小山田里迄ハ多磨郡ニ属せり平山或ハ幾よ作る）
横山なる　既ニ古奇ゆゑと玉の横山と詠せる皆此間よりあり又官林の
案内山と云より神奈川迄の間ハ都筑郡ニ属せり南北ニ高底あり
坂東路几百里あまりの岳の名ありとぞ

青沼明神　同所長沼村八王子通道の傍よあり　祭神大田命猿田彦
大神二神なり　勧請の初をあらず　社司福島氏奉祀を祭禮ニ
八月十五日なり
按ニ當社ハ延喜式内青渭神社なるよし長沼の号ありと云されハ
なるへし名類聚抄ニ武蔵國（此地ハ多磨郡淺橋樹郡ニ
寛文三年綺改ニ属せり）企郡小渭後と云る地名を載く（太平記ニ正平七年閏二月小手差原合戦の条下ニ将軍の陣へ
馳参る人々中ニ長沼判官入道と云ハ此地より起れる名乎）
然る時ハ當社を以延喜式内の青渭神社と称ハ大ニ非ス此辺地を掘穿つるニハ土中巻く沼土
ありと和名類聚抄ニ武蔵國（此地ハ多磨郡淺橋樹郡ニ
寛文三年綺改ニ属せり）企郡小渭後と云る地名を載く（沼乃之利と訓せ猶後人の考ニ俟のミ）

仙谷山壽福禅寺　谷の口の東の山續矢の口渡し場より十三町東南の方
菅村よあり　推古天皇六年戊午聖徳太子草
創なりしの佛刹なりしかの　当寺十境の一なり
より禅林とす　今ハ曹洞汎とかりて越前の永平寺よ属せ
本堂本尊十一面観世音　相伝ふ　島佛師の雕刻或云和州長谷寺の像と同木
同體なりとの　大會堂と号く　当寺十境の一なり
鐘　石よあり井田六郎右衛門尉某憲永七年庚辰當寺住持の沙比丘宗四の頃半
鐘を寄進ず破裂ふよりて鋳改ふ
阿弥陀堂　同し左よあり　当寺住持監融峯の文ふ
六寸作者不知左右ふ地蔵多門ホの像を安す　鎮守宮
大黒辨天の四座をまつる　八幡稲荷
指月搗　當寺の流ふ架もる衣搗を
号す當寺十境の一なり　是も十境の一なり

もゝし
壽福寺
掛月橋

餐霞谷 同所の庫裡の後の谷を云道撒の旧跡なり 故ふ今採薬阜 秦徐福日本より来り仙薬を採と云 攫霧松 同所関の左よりあり一本今ハ枯 土俗道祖神松と云一根五抱と云 晩成室 方丈 十境の一なり

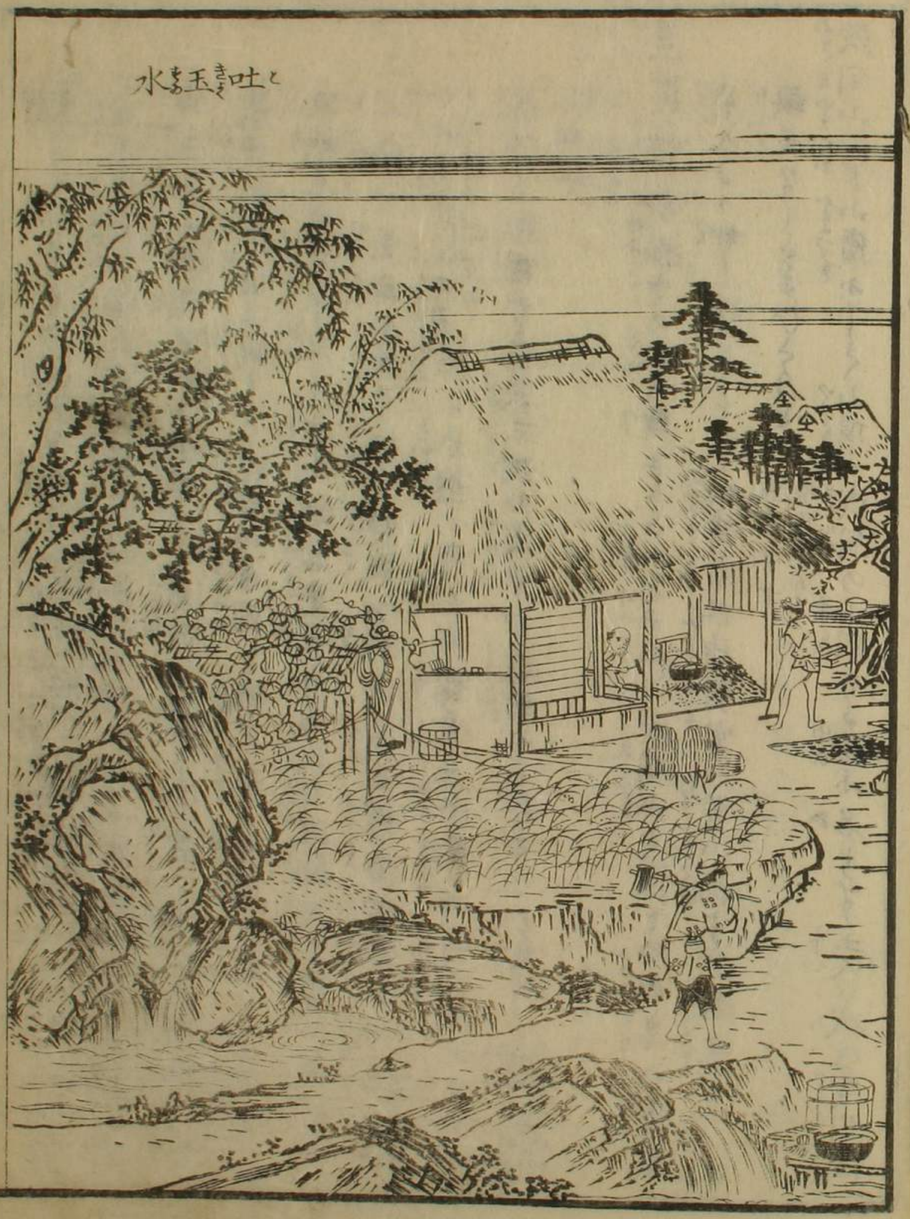
大般若経六百巻 梵函を収蔵す 紙ハ黄色中古名徳高素の毫痕其名を注せり 相伝ふ文治年間源義経と弁慶ふ忍び此地より鎌倉へ赴く時寺僧の四巻ありそ寺観音のそば迄送り帰る弁慶ハ其後の旧跡を追ひ当寺観音の像を写す永徳壬戌鎌倉左兵衛督氏満師の徳を慕ひ参詣の次再ひ此経の蠹損を修補する由縁起よりしるす

夫仙谷山寿福寺者推古天皇六代戊午年聖徳太子就于高橋妃入阿弥尼公終焉之地建七区練若以資冥福之舊趾也蓋山曰仙谷者有仙人道鏡者栖遑于此山錬行修身積有年矣故亦曰道鏡谷也今古怪異之事甚多矣是仙人所為也寺曰寿福者曾芟榛夷地之時得虚空蔵薩埵之像因標福一満之聖跡以祝寺之後建長曜侍者騰虚空蔵経一軸而乞石室玖禅師化之于墨攴捍寄焉寺像十一面観自在薩埵者権和州長谷寺之像同木同雕也康平年中八幡太郎源義家欲排村奥州逆徒出陣之時中路而宿于茲竭小太郎義忠祈開運於斯像後果獲遇感矣在昔小澤小次郎重政每晨旋歩像前勉於晨香夕燈修現當之善因矣梵函大般若経者名網高素之毫痕也文治年中源義経消弊慶暫想行於此地追曽祖之冏跡祈叔父之応験特復傳写経之厥後兵災寺既敗壊年久矣雖然冏大方慶和尚卓錫此地力與荒廃始振禅風僧俗雲集永徳壬戌年鎌倉左兵衛督氏満帥再修補此経之次一面大悲像於大黒天尊天八幡大菩薩稲荷大明神於権護廟縣是仰皇圖之鞏固祈佛運之紹隆而蠹々不怠焉

応永十四丁亥稔六月十八日 沙門宗圓敬記焉

相傳 推古天皇六年戊午聖徳皇太子高橋の妃のと妣入阿弥尼公終焉の地よ就て七區の練若を創建し以て冥福を資の舊蹟なり山を仙谷といふ仙人道鏡なる者此山よ隠栖し練行修身事積年あり故よ亦道鏡谷とも云今古怪異のみ甚多し是寺を寿福と号曽て芟椿夷地の時虚空蔵薩埵の像を得り因て福一満の聖躅を

水玉を吐く



標し、そ以て寺の速大を祝せ後建長、曜待者、虚空蔵往一軸を勝もくるのみ
康平年間八幡太郎義家奥州征伐出陣の時中路並よ宿を其頃、當石室善形禅師の手墨鏡梓し、寺に寄す
寺本るを開運を祈る後果して感遇を獲ると昔小澤小太郎重政毎
晨歩を像前よ旋し、く現當の善因を修す然よ兵災よ遺く寺宇既に
敗壊せるの年久し、爰よ鎌倉建長寺の大安禅師大方慶和尚此地よ
卓錫し荒廃を興し始く禅風を振ふ故よ僧俗雲集を或云建長寺
八十四世法慶
といつるも詳なり
慕ひく参謁せるの次三個の殿宇を造営せられとなり
慶擴
願是也

展翼峰　壽福寺の左よ聳るる山を云俗よ神明山とのみその形鳥の翼
展くるう如し故よ号とす相傳當社神明宮ハ昔小机より飛来こゝに
鎮座なしまひしとと云壽福寺境の一なり
浅間山同し山續ふしく山頂よ浅間の小祠あるよ名とす土人ハ城の浅間山
三個と所稱大會堂善應

と云是も壽福寺十境の一ゆゝく光照崖と号す判棘を刻き小
篠をまけ登るく数十歩絶頂よ至り崖よ臨そ眺望されハ眼界
蒼茫とゝく山水の美筆端よ尽しかたし
地あり小澤の城
の下よ詳なり

吐玉泉　壽福寺より後の方の谷を隔く西の山際農民の地よあり水源
白砂を吹出せ故よ号とす昔ハ小澤の白清水くいふ是も壽福寺
十境の一なり

大谷山法泉寺　吉祥院と号せ壽福寺の南十町そゝを隔てく菅村の
内府中道の右よあり
稲毛領小澤郷よ属に
屬せり阿弥陀如来を
かまるとす

薬師堂　寺より西の後一町半そゝあり又縁日八九月八日十二日ゆそ此日もまこゝろある賑ハへり
本尊薬師如来の像ハ慈覚大師刷造しゝとのゝ相傳左馬頭義朝の
御臺所常盤御前護持の霊像くゝ文治三年丁未八月廣山の文
毎歳八月十二日狮子舞あり弓を携へ

法泉寺（ほうせんじ）

顯阿闍梨此地の領主稲毛三郎重成と共よ謀り當山を開き一宇の梵刹と〳〵此靈像を安置せ〳〵る後平政子御前崇敬あり其頃頼朝卿よりも香花の資料と〳〵く當國高麗郡の地を寄附せ〳〵る建久八年丁巳頼朝卿當寺へ詣し給ふ又康元二年丙辰五月頼嗣公頼経公の菩提のため御堂再興なし給ひより大伽藍となり〳〵元慶建武の兵乱よ廢壊せしより後旧貫よ復せるなりと也鎧甁唐木小机等よ二品ハ頼朝卿の寄附なりと云傳く當寺の什宝とす

江戸名所圖繪全部廿卷目次

壹之卷三冊　日本橋本町通神田小川町飯田町兩國靈巖島八町堀築地
鐵炮洲芝口愛宕下西久保赤羽根三田魚籃白銀芝浦
二之卷三冊　品川驛大井鈴ヶ森池上矢口大森蒲田八幡六郷川崎鶴見
生麥神奈川本牧程ヶ谷杉田金澤
三之卷四冊　外櫻田霞關永田馬場平川溜池麻布廣尾青山目黒碑文谷北澤
世田ヶ谷澁谷四谷千駄ヶ谷代々木高井戸武藏野府中玉川向ヶ岡
四之卷三冊　市谷牛込小石川大窪柏木成子堀之内中野小金井築土高
田大塚雜司ヶ谷巢鴨扳橋練馬大宮野火止
五之卷二冊　湯島上野日暮根津谷中三崎駒込王子川口豊島川
六之卷二冊　淺草下谷根岸山谷橋場千住西新井
七之卷三冊　深川本所龜戸押上柳島隅田川木下川松戸行德國府臺
八幡船橋

天保五年甲午孟春

日本橋通壹丁目　須原屋茂兵衛
淺草茅町二丁目　須原屋伊八

出版　未春
發行

三都發行書林

京都寺町通松原下ル　勝村治右衛門
大坂心齋橋筋唐物町　河内屋太助
大坂心齋橋筋安堂寺町　秋田屋太右衛門
江戸兩國吉川町　山田佐助
江戸神田鍛冶町二丁目　北島順四郎
江戸淺草新寺町　和泉屋庄次郎
江戸芝神明前　岡田屋嘉七
江戸日本橋通二丁目　山城屋佐兵衛
江戸日本橋通二丁目　小林新兵衛
江戸日本橋通四丁目　須原屋佐助
江戸南傳馬町壹町目　須原屋文助
江戸神田通新石町　須原屋源助